

# 第76回全国植樹祭関連事業



～こどもたちの「生きる力」を育むため、園庭や地域の森林等の整備・緑化を推進する～

## こどもの森づくりフォーラム in えひめ



こどもの森づくりフォーラム実行委員会





# 目次



## プログラム概要

### フォーラム

開 会 式	実行委員長挨拶 公益社団法人 国土緑化推進機構 副理事長 沖 修司 実行委員挨拶 愛媛県 副知事 菅 規行	4
基調講演 1	公益社団法人こども環境学会 代表理事 仙田 満	6
基調講演 2	むぎの穂保育園 園長 出原 大	8
事例発表 1 (保育・幼児教育による先進事例)	大護さとやま認定こども園 園長 田中 真由美	10
分 科 会 1 「園庭緑化」報告	田園調布学園大学大学院 准教授 仙田 考	11
事例発表 2 (行政・教育機関等による支援事例)	株式会社今治 夢スポーツ しまなみアースランド インストラクター 久保田 真依	12
分 科 会 2 「森林環境教育」報告	愛媛大学農学部 准教授 鍋嶋 絵里	13
パネルディスカッション	【パネラー】仙田 満 / 鍋嶋 絵里 / 出原 大 / 井部 健太郎 / 久保田 真依 【コーディネーター】宮林 茂幸	14
パネルディスカッション概要	東京農業大学 名誉教授 宮林 茂幸	19
次回開催県挨拶	奈良県 環境森林部 森林環境課 課長 吉浦 慎治	20
閉 会 式	林野庁 森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長 諏訪 幹夫	21

### 分科会 1

むぎの穂保育園	副園長 田中 真由美	22
みかんこども園	園長 大野 京子	23
すみれ幼稚園	園長 久木 哲	24
カナン子育てプラザ 21	園長 伊禮 知代	25

### 分科会 2

愛媛大学農学部	准教授 寺下 太郎	26
えひめ自然保育連盟	理事 吉村 尚子	27
久万造林株式会社	代表取締役 井部 健太郎	28
徳島県那賀町役場	那賀町林業振興課 横田 泰宏	29

### サイドイベント

森林体験	えひめ自然保育連盟 代表 山本 良子	30
木育講座	株式会社大五木材 高橋 佐智子	31
エクスカーション		32
パネル展示		33

### 参加者属性 / アンケート結果

#### 関係団体紹介

公益財団法人 イオン環境財団	36
一般社団法人 日本森林林業振興会 / 一般社団法人 日本森林林技術協会 / 公益財団法人 ニッセイ緑の財団	38
愛媛県林材業振興会議 / 愛媛県森林土木協会 愛媛県山林種苗農業協同組合 / 一般社団法人 四国林業土木協会	39
松山市 / 東温市	40
第76回全国植樹祭愛媛県実行委員会事務局	41
公益財団法人 愛媛の森林基金	42
公益社団法人 国土緑化推進機構	43
林野庁 / NPO 法人 子どもの森づくり推進ネットワーク / えひめ自然保育連盟	44

### 資 料

こどもの森づくりフォーラム実行委員会名簿 / アーカイブ	
------------------------------	--



# プログラム概要

## ■ 全体プログラム

開催日	開催時間	プログラム	会場
11月30日 (土)	10:00～15:00	森林体験	えひめ森林公園
	10:00～15:00	木育講座	えひめこどもの城
	9:30～16:00	エクスカージョン	すみれ幼稚園⇒むぎの穂保育園 ⇒大護さとやまこども園
12月1日 (日)	10:00～11:30	分科会1・2	松山市民会館 会議室
	12:30～16:15	フォーラム	松山市民会館 中ホール
	11:30～16:15	パネル展	松山市民会館 中ホールロビー

## ■ 分科会

**【分科会1】** 子どもたちに、日常的に自然の体験を提供する「園庭緑化」(参加者数：56名)

プログラム	担当者名	所属/役職
先進事例発表者 話題提供者	田中 真由美	むぎの穂保育園 副園長 (愛媛県東温市)
	大野 京子	みかんこども園 園長 (愛媛県伊予市)
	久木 哲	すみれ幼稚園 園長 (愛媛県松山市)
	伊禮 知代	カナン子育てプラザ21 園長 (香川県善通寺市)
コーディネーター	仙田 考	田園調布学園大学大学院 准教授 国際校庭園庭連合日本支部 代表

**【分科会2】** 子どもたちの「環境の心」を育む「森林環境教育」

(参加者数：46名)

プログラム	担当者名	所属/役職
先進事例発表者 話題提供者	寺下 太郎	愛媛大学農学部 准教授
	吉村 尚子	えひめ自然保育連盟 理事
	井部 健太郎	久万造林株式会社 代表取締役
	横田 泰宏	徳島県那賀町役場 林業森林課 係長
コーディネーター	鍋嶋 絵里	愛媛大学農学部 准教授

こどもの森づくりフォーラム in えひめ  
総合司会

2024年度 ミス日本みどりの大使  
安藤 きらり





## ■ フォーラム

(参加者数：312名 ※関係者含む)

タイム	プログラム	登壇者
12:25	開演予告	司会
12:30	司会あいさつ	司会
	開会式 実行委員あいさつ	(公社) 国土緑化推進機構 副理事長 沖 修司 (実行委員長)
		愛媛県 副知事 菅 規行様
		松山市 副市長 田淵 雄一郎様
	伊予市 市長 武智 邦典様	
12:45	基調講演 1	(公社) こども環境学会 代表理事 仙田 満氏
13:15	基調講演 2	むぎの穂保育園 園長 出原 大氏
13:45	～ 休 憩 ～	
13:55	保育・幼児教育における先進事例	大護さとやま認定こども園 園長 田中 真由美氏
14:10	分科会 1 「園庭緑化」 報告	田園調布学園大学大学院 准教授 仙田 考氏
14:25	行政・教育機関等による支援事例	株式会社今治 夢スポーツ しまなみアースランド インストラクター 久保田 真依氏
14:40	分科会 2 「森林環境教育」 報告	愛媛大学農学部 准教授 鍋嶋 絵里氏
14:55	～ 休 憩 ～	
15:05	パネルディスカッション	<b>【パネラー】</b>
		株式会社今治 夢スポーツ しまなみアースランド インストラクター 久保田 真依氏
		久万造林株式会社 代表取締役 井部 健太郎氏
		愛媛大学農学部 准教授 鍋嶋 絵里氏
		むぎの穂保育園 園長 出原 大氏
		こども環境学会 代表理事 仙田 満氏
		<b>【コーディネーター】</b>
東京農業大学 名誉教授 宮林 茂幸氏		
16:05	閉会式	奈良県 環境森林部 森林環境課長 吉浦 慎治氏
		林野庁 森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長 諏訪 幹夫

## 実行委員長挨拶

こどもの森づくりフォーラム実行委員長  
公益社団法人 国土緑化推進機構 副理事長

沖 修司



この度は、こどもの森づくりフォーラムに県内外から多くの皆様にお集まり頂きまして、誠に有り難うございます。また、日頃より緑の募金などを通じて、国土緑化運動にご支援・ご協力を賜り、改めて御礼申し上げます。

さて、このフォーラムは、令和8年に愛媛県で開催されます第76回全国植樹祭の関連事業として、昨年の埼玉県秩父市に引き続き、「こどもと森づくり」をテーマに、松山市民会館をメイン会場として開催します。

愛媛県は、森林資源がとても豊富で、県土の約7割が森林に覆われ、スギやヒノキの人工林が森林の約6割を占めています。特に、「ヒノキ」の産出量は、かつて5年連続で我が国第1位になるなど、全国有数のヒノキ産出県として知られています。中でも、久万高原町を中心に広がる久万林業は我が国を代表する林業地の一つであり、明治以降の先人達の努力により人工林が造成され、人と森の深い関係が築かれてきました。

しかしその一方で、我が国全体を俯瞰すれば、森林が広がる地域であっても戦後以降の高度経済成長や燃料革命などにより、高度化複雑化する社会経済状況の中で私達と森との関係は分断され、特に子供たちが体得すべき森での体験が希薄になってしまったように思います。

こうした中であって、近年の研究において、森での体験活動がこれからの子ども達の「生きる力」につながっていくことが知られようになってきました。

愛媛県は、松山市などの都市部を支えるように県南に森林地域が広がっています。この地勢上の特徴も活かし、改めて子供たちが森との関係を再構築し、生きる力を身に付けられるような取組を進めてみようではありませんか。

本日は、基調講演に、公益社団法人こども環境学会代表理事の仙田先生とむぎの穂保育園園長の出原先生にお越し頂きました。誠に有り難うございます。

また、パネルディスカッションコーディネーターの東京農業大学名誉教授宮林先生をはじめ、大護さとやま認定こども園園長田中様、田園調布学園大学大学院准教授の仙田先生、株式会社今治 夢スポーツインストラクター久保田様、久万造林株式会社代表取締役井部様、愛媛大学農学部准教授鍋島先生にはどうぞよろしくお願ひします。

国土緑化推進機構では、全国植樹祭の開催を契機に、子どもと森づくりに着目した運動を推進していくこととしております。皆様方の引き続きのご支援ご協力をお願い致します。

結びに、このフォーラムの開催にご尽力頂きました愛媛県、松山市、伊予市をはじめ多くの関係者の皆様に御礼を申し上げ、私の挨拶と致します。有り難うございました。

## 実行委員挨拶

愛媛県 知事 中村 時広  
代理 愛媛県 副知事  
菅 規行



本日、第76回全国植樹祭関連事業「こどもの森づくりフォーラム in えひめ」が盛大に開催できますことを大変うれしく思いますとともに、全国各地から御来県いただきました皆様に心から歓迎いたします。

また、本フォーラムの開催に向けましては、国土緑化推進機構の沖修司副理事長をはじめとする多くの関係者の皆様に多大なお力添えを賜り、改めて厚くお礼申し上げます。

愛媛県では、令和8年春に天皇皇后両陛下の御臨席を賜り、60年ぶりとなる第76回全国植樹祭を開催いたします。「育てるけん 伊予の国から緑の宝」を大会テーマとして、本県が誇る森林資源に対する理解を深め、緑豊かな森林を健全な姿で未来に引き継いでいく契機とするとともに、多くの人々の記憶に残る愛媛らしい大会となるよう、現在準備を進めているところでございます。

今回のフォーラムは、「こどもの森づくり」をキー

ワードに実施しており、全国の保育・幼児教育者の皆様、森林・林業関係者の方々、更に地域住民の皆さんなど、多様な人々が一堂に会し、未来を担う子どもたちに幼児期から森林環境教育を行っていくことの意義や重要性を共有することができる非常に貴重な機会と考えております。

どうか御参加の皆様には、本フォーラムの基調講演、事例発表、パネルディスカッション等を通じまして、身近な緑化活動の推進やネットワークの強化につなげていただき、急速な少子化・人口減少、デジタル技術の進化、グローバル化の進展など、激しく変化する時代を生きる子供たちが、思う存分「森林とふれあい」、「自ら考え」、「行動できる力」を養うことのできる森林環境教育の更なる充実にお力添えを賜りますようお願いを申し上げます。

終わりに、皆様のますますの御健勝、御活躍をお祈り申し上げまして、挨拶といたします。

## 実行委員紹介



松山市 副市長  
田淵 雄一郎



伊予市 市長  
武智 邦典

## 成育環境としての自然環境

～こどもの自然体験が育む挑戦力～

公益社団法人こども環境学会 代表理事

仙田 満



今私達の国で起きているこどもの成育環境の問題の中で、環境建築家として、こども環境学会の代表理事として、とても心を痛めている事は、こども若者の自殺である。先進諸国の中でも多く、我が国のこども若者はなぜ、死ななければならないのかという問題である。自殺はほとんど、その原因は精神疾患だという精神医学者もいる。ではなぜ今、こども若者が、うつや精神的な病におちいらねばならないのか。しかも、自殺するのは、4月10日とか、9月1日という学校の新学期が始まる時に集中している。いじめや、学校成績の事が多く直接的な原因として報道されるが、その背景に今日本のこども達の成育環境にもっと大きな問題があるのではないかと考えている。

たとえば、学校という空間がその原因をつくっているのではないかという指摘もある。今の学校の教室のスタイルは、約200年程前にイギリスの教育学者ジョセフ・ランカスターが規律伝達型教室として発明したものが世界に伝播している。学校は兵舎や監獄と似ているともいわれ、教室が廊下に繋がっている空間は、管理しやすいが、こども達の居場所のない空間でもある。教育が知識伝達型から、主体的な問題発見型に移行している傾向がある中で、新しい学校空間では、こどもの居場所、学びの多様性などが提案されている。

しかし、私がこどもだった70年前も日本の多くの学校は、ランカスター型の廊下教室型の校舎

だった。なぜ、今それが問題だといえ、こども達の生活があまりにも学校中心になってしまっているからともいえる。かつて、こども達は学校以外に地域で様々な遊びの体験をし、友人関係を築いてきた。困難な状況に陥っても、気持ちを立て直す場が地域にたくさんあったといえる。私の調査によれば、この半世紀で我が国のこどものあそび空間は、量的には、1/100というオーダーで小さくなってしまっている。家と学校という極めて狭い世界の中で、こども達が精神的にも追い詰められているといっても言い過ぎではない。そして、こども達の遊び環境は、空間、時間、コミュニティ、方法という4つのエレメントにより構成され、それぞれが相互に影響し合いながら、この50年間悪化していった。特に遊びの方法という点で、1960年代のテレビ、1985年代のテレビゲーム、2000年代のスマホというツールが極めて大きくこども達の遊び環境を変化させ続けてきた。それは外での遊びを、中へ遊びに変え続けてきた。

我が国では、子どもの為の身近なあそび場を失っていく傾向は、都市部のみならず、田園地域でも、私の調査でも1990年頃から同じようなものになってしまっている。

このような状況のなかで、こども達にとって最も身近な園や学校の空間を変えて行くことが重要であると考えている。従来、園庭や校庭はオープンスペースを中心としてきた。運動会のための空



間であったが、それを日常的に小山や小さな水場のある森に変えて行く事を国際校庭園庭連合の仙田考支部長が本フォーラムで提案している。これに全面的に賛同する。

こどもの身体的な能力において、特に体を巧みに動かす力、バランス感覚等は、9歳ごろまでに獲得しなければならないとしている。かつては、こども達は野山であそぶ事によって自然にその力を身に付けてきた。幼児の段階での外遊びや友達とのあそびにおいて、あそぶ場が平らでなく、山があり、斜面がある事が大事なのである。自然の中での遊びは、生命、生き物との触れ合いの中で、こども達の豊かな感性を作り上げる。情緒性や、感受性の開発がなされ、様々な認知能力を獲得していく。そういう意味において、幼稚園や保育園、こども園の園庭空間も豊かな自然を体験できるよう、そして、小学校の校庭も運動場よりも森がある必要がある。サッカー等の運動遊びは、フットサルコートのようにもっと小さなものにして、校庭を地域の森にして、こども達の自然体験の場として、地域の空間整備をしていくことが望ましいと考える。私が関係した設計例として、園庭を森化した事例はないが、近いものとして、椋山女学園こども園や軽井沢風越学園を上げたいと思う。椋山では仙田考支部長がデザインを担当しており、風越は授業の一環として、こども達のプロジェクトの中で森化、プレーパーク化が行われている。日射が激しい近年、より日陰の空間を、外部空間にする事が、園庭環境、校庭環境としても重要で

ある。森はこども達にかくれる場を与える。森はこども達に困難に出会った時、気持ちを立て直す場として機能する。又、森は探求の場をもたらす。森はこども達に挑戦力を育てる。我が国のこどもの成育環境として、こども達が困難に立ち向かえる精神力を育む場として、園庭、校庭を森に変えていきましょう。

最後に今回のフォーラムに参加し、皆様方のこどもの森づくりのさまざまな取り組みをお聞きし、大変感銘をうけた。一方、愛媛県でも、若い人と年輩では、そのあそび環境の体験の違いの大きさに、驚かされた。20才、30才代の方々では、地域でのあそび体験があまりない事も実感された。こどもの森づくりの一步一步の活動が、大きな流れになる事が期待される。保育園、幼稚園、こども園、小学校、中学校の園庭校庭を森林化し、こども達の日常的な生活の中で、自然体験活動が行われ、又、地域における緑化、景観、コミュニティの拠点になる事を期待したい。一緒に頑張りましょう。



椋山女学園大学付属幼稚園 (2014)



軽井沢風越学園 (2020)

### 幼少期に自然環境にふれることの意味

～子どもの成長と植物環境の関係から考える～

むぎの穂保育園 園長

出原 大



#### ●はじめに

わたくし自身自然・植物に興味・関心を持ったきっかけは、母の植物好きに影響を受け、その母に認めてもらいたい・受け止めてもらいたいという思いから自然・植物に親しむ心が芽生えていきました。だから、自然を愛でる大人の姿が大事であるということを最初に提言しました。

#### ●自然環境にふれることの意味

以下、自然環境にふれることの意味について、画像と保育実践事例をもって3つの柱

①なぜ自然の中で？②自然の中で心を動かす③生命の尊さに気づく についての提言を行ない、フォーラム参加者の皆様と共に考える時を持ちました。

※事例：子どもの庭づくり / 木の皮をむく / 植物を使っての色水 / 葉っぱを砕く / 木の実を割る / 木の実を食す / 森林浴 / 命に触れる経験 など

#### ●なぜ自然の中で？～自然環境で元気に遊び、心も体も健康に～

自然は、子どもの健全な成長や発達に欠かすことのできないものです。人間は自然の一員として自然と共存してきた長い歴史があり、自然環境の中で心身が落ち着くことはごく自然なのです。だから、子どもたちは、自然環境が豊かな空間に入ると、自ら体を動かして遊びだします。そして、

緑を見て、森の香り（※フィトンチッド）を感じて心を安定させます。これが、健康な心身を育む子ども本来の姿です。今、自然の中での遊びが本当に少なくなった子どもたちのために、私たち大人は、思いきり自然環境にふれて遊ぶ機会と場所を与えてあげるべきでしょう。

※フィトンチッド（英 phytoncide）とは、もともとギリシャ語の“phyto”「植物」と“cide”「殺す」に由来しており、植物から放散される物質が植物を攻撃する微生物、細菌、昆虫などを殺す働きを指す造語である。このフィトンチッドは、1928年に旧ソ連のボリス・ペトロビッチ・トーキン（Boris Petrovich Tokin）によって発見され、当初は、スギ、ヒノキなどの針葉樹系から放散される植物性揮発油成分の $\alpha$ -ピネンが植物の自己防衛をするとともに、人間にも精神の安定に繋がる効果をもたらすという定義であった。現在ではフィトンチッドの定義もより広義な意味で使われるようになり人間のリラックス効果・精神の恒常性を保つ作用があると認められている。

#### ●自然の中で心を動かす～自然への興味・関心が広がり、豊かな感性が育まれる～

幼少期は、人生で一番心の動く時期。だから、心を大いに揺さぶってくれる自然体験がとても重要になってくるのです。これは、単に自然の知識を得るということだけでなく、五感を通して「わあ、きれいだな」「いいにおいがする」「おもしろい音だな」「ごつごつしているな」「おいしいよ」といった様々な感覚を体験することが大切なのです。子どもたちは、実際にふれる中で、自然の変化を感



じ、自然と遊び、心が動かされていきます。これが、自然に対する興味・関心につながり、豊かな感性が育まれていくのです。さあ、私たち子どもの周りにいる大人たちも、共に心を動かして自然に目を向けて共鳴していきましょう。

### ● 生命の尊さに気づく～動植物とのふれあいによって、生命の尊さに気づく～

生き物の飼育や植物の栽培を通してさまざまな自然物にふれることは、多くの命にふれるということです。子どもたちは、これらの経験から、育てている生き物をいとおしく思うようになります。そして、時に生き物の死に直面したり、収穫した野菜を食することから命を得ることを感じたり、命への直接・間接的なかわりを体験します。これがまた、人間同士、相手のことを考え、思い、愛する心をはぐくむことにもなるのでしょう。命の尊さを知るには、実際の命ある生き物とのふれあい、かわりが重要です。そのためにも、私たち大人が共に優しく動植物の世話をし、つねにまなざしを注ぐ姿勢を子どもたちに見せることが大事なのです。



むぎの穂保育園 園庭



### ● レガシーとしての提案

- ① 愛媛から日本全国に自然環境が豊かな園庭・保育環境の意義を発信
- ② 幼稚園教育要領・保育所保育指針・認定こども園保育教育要領  
具体的な明記 → 自然環境豊かな園庭・環境の重要性・方法論
- ③ 学童期 自然教育から環境教育 連携
- ④ 幼少期の子どもたちのあそび（自然環境豊かな場所での）の確保  
→ 子どもたちが主体的にあそべる環境（自然環境豊かな）づくり（時間・場所）

### ● おわりに

本フォーラムでは、「子どもを自然に還す」をテーマに以上の提言を行ないフォーラムでの話題提供を終えました。フォーラム後も多くの方々から反響を頂きました。今回の収穫は、単に自然好きの教育談義に終わらず、今、教育の根幹を成す自然教育の意義が明確になってきたように思います。ここでこの灯を絶やすのではなく、皆さんとの繋がりを持って行動していきたいと存じます。

# 事例発表 1 (保育・幼児教育による先進事例)

大護さとやま認定こども園 (愛媛県松山市) ■ 豊かな園の森を活用した自然保育実践例 ■

## 心揺さぶられる自然体験

大護さとやま認定こども園 園長

田中 真由美



当園は、昭和48年創立。平成3年に市街地から松山市の東部にある四国八十八か所霊場第五番札所繁多寺の山つづきの高台に移転して32年が経ち、今年で創立52周年を迎えた幼保連携型認定こども園です。大護は「こころのふるさと」だから、“いつでも帰っておいで”と送り出した卒園児が、今では職員や保護者になって多く戻って来てくれています。

こどもの森づくりフォーラムを終えて、改めて創立者の思いや、当園の自然環境がいかにも恵まれているか、また次の世代につないでいくことの重要性などを再認識できたように思います。発表させていただいた事例の中には0歳から5歳までの子どもたちの姿があり、ここに行きつくまでには発達年齢に応じた一つ一つの積み重ねがあります。

園舎の裏山、だんだん山にある展望台への道は、月齢の低い子どもたちにとっては、少しバランスを崩すと、うしろにひっくり返りそうになるくらいの勾配ですが、まずはゆっくり時間をかけて自分のペースで進めるように保育者と手をつないで登っていきます。途中で引き返すこともあります。経験を重ねる中で、次第に自分の力で登ろうとする姿が見られるようになってきます。自分でやってみたい気持ちを大事にし、“危険な時はすぐに手を差し伸べるよ”と安心感を与える

絶妙な距離感を保ちながら登っていきます。すると、子どもたちは登る時に少しバランスを崩しヒヤッとした場所に差し掛かると、立ち止まり位置をずらしたり、手をつき後ろ向きに降りたりします。子どもたちは自然の中で、様々なことを考え、感じ、自分で登れた！できた！という成功体験を積み重ねていくことで、またやってみたいという次への意欲につながっていきます。

創立者 仙波 清が掲げた教育理念「知恵と勇気とおもいやり」の原点は、「生きる力を育む」ことだということが、現代においても受け継がれています。この恵まれた自然環境の中で、身体のバランス感覚や危機回避能力、しなやかな身のこなし、そして何より五感を通して豊かな感性を育てているのだと改めて感じます。

豊かな自然を持つ園としての役割は、子どもたちが自然の大切さに気づき、感謝し、そして共存していく。そのことを次の世代につないでいくことだと考えます。これからも園の子どもたちだけでなく、保護者、地域の方々と共に感じ、学び知る喜びを味わい、たくさんの「心揺さぶられる自然体験」をしていきたいと思っています。



# 分科会1「園庭緑化」報告

～子どもたちに日常的に自然の体験を提供する「園庭緑化」～



田園調布学園大学大学院 准教授  
国際校庭園庭連合日本支部 代表  
分科会1コーディネーター

仙田 考

分科会1では、「子どもたちに日常的に自然の体験を提供する「園庭緑化」」のテーマで、愛媛県、及び近隣県で、日常的に幼児期の子どもたちに多様な自然の体験を提供する園庭緑化に取り組んでいる保育園・幼稚園・こども園から先進的な実践事例を発表いただきました。またその後、登壇の先生方とともに園での緑化についてのパネルディスカッションと会場からの質疑応答を行いました。

むぎの穂保育園の田中真由美先生は「森の園庭における保育実践から見たこと」と題し、近年開所された保育園の園庭に森を園保育者、地域とともに創生し、そこでの四季の移り変わりとともに、生活の中で豊かに自然とかかわる子どもたちの姿を生き生きと語っていただきました。自然物を取り込んだ砂場あそびや、倒木をあそび環境と変えるエピソードが印象的でした。

認定こども園みかんこども園の大野京子先生は、「園庭を森にしたい」と題し、長年園庭を森にしたいと考えてこられた園長先生の熱い思いから、植木鉢や地道な植栽などの試行錯誤を経て、本格的な職員参加の園庭づくりへとつながった園庭緑化の実践と、その後の子どもたちの自然とのかかわり、緑の効果（夏の涼しさ）等、今後の展開について語っていただきました。

認定こども園すみれ幼稚園の久木哲先生は、開園50年以上を迎える園の庭を、「自然と共に、人と共に生きる喜びを分かち合う」というキリスト教精神のもと、グラウンドから森へと豊かな植栽を通して変容し、園庭の自然や植栽はもちろん、室内（保育室、廊下）にも自然素材を持ち込んで、園全体で自然いっぱいの保育が展開される様子をご紹介いただきました。

カナン子育てプラザ21の伊禮知代先生は、「一人ひとりの発見～園庭の小さな研究者たち～」と題し、保育者、保護者、卒園児みんなで園庭の広場の様々な植栽を行っていき、年齢に関わらず、子ども達が身近な園庭の自然とふれあいながら、五感すべてを使って、チャレンジし、遊びこみ、あそび・生活を楽しんでいくすがたを魅力的にお話しいただきました。

ご発表すべてに通じて、子どもたちが生活の中で身近な自然とかかわることのできる機会と環境の大切さ、そしてそのためにも園庭に森があることが大切だ、森でなければならない、というメッセージが心に響きました。

以上の話題提供を受けて、パネルディスカッションでは進行者の仙田から、各園で園庭緑化を始めるにあたってどのようなハードルがあったか、またどのように乗り越えてこられたかについてお聞きしました。今回のご発表園はむぎの穂保育園園長で園庭緑化専門家の出原大先生が園庭緑化に関わられた園でしたが、その事前に園独自に緑化を試して技術的にうまくいかなかったり、先生方で自然への興味がそれほど得られないうち、ということもあったようでしたが、実際の緑化を通して子どもたちの自然と豊かにかかわる姿から、先生方もその価値に気づいていったようでした。

また、会場の参加者の方々にご質問をお寄せいただいて、登壇者の方々にご回答いただきました。話題提供のお話からの具体的なご質問が多く、「園庭を変えたことによって室内遊びが変わったことがありますか」「ペゴニア以外にも色水、においが面白い植物があれば教えてほしい」「草木が定着するまでの園庭管理はどうしていますか」「オーガニック給食（すみれ幼稚園）の作り方、取組みについて教えてほしい」「園庭づくりをしているが、遊びこめなくて走る子どもがいるが、植物を使った遊びなどに引き込むにはどうしたらよいか」などがありました。そして会の最後に出原大先生から園庭緑化を行いたい園のみなさんに向けて、あたたかなエールをいただきました。

園庭の環境は園によってさまざまです。小さな園庭でも、園庭が無くても、プランターや植木鉢など、工夫次第で緑化を始めることはどの園でもできていると思っています。

「分科会1園庭緑化」のセッションが、今後の園庭緑化への小さくて大きな一歩につながりますことを、心より願っています。みなさま、ご参加有難うございました。

## 事例発表 2 (行政・教育機関等による支援事例)

株式会社今治. 夢スポーツ しまなみアースランド (愛媛県今治市)

### 自然体験型環境教育プログラム moricco (もりっこ) について

株式会社今治. 夢スポーツ  
しまなみアースランド  
インストラクター  
久保田 真依



#### 【はじめに】

moricco とは、愛媛県今治市にあるしまなみアースランドという指定管理施設で、FC 今治が実施している自然体験型環境教育事業です。

#### 【しまなみアースランドとは】

「自然に親しみ、体験を通じて自然との共生を学ぶ」というコンセプトで作られた公園で、FC 今治が今治市から指定管理を受託しています。もともとは山だったため、多くの木々に囲まれており、森の一部を利用して moricco を実施しています。

#### 【moricco について】

自然の中で様々な体験を通し、思いやりとありがとうの心を育む環境教育活動です。

園向けには、プログラムの時間と自由遊びの時間を設けています。プログラムは季節に応じた内容になっており、生き物との接し方や火との関わり方などを、紙芝居等を使って伝えています。その後、自由に遊んだり、森でお昼ご飯を食べたりして、最後にインストラクターと今日の振り返りをして終わる、3 時間半の活動になっています。自由に遊ぶ時間には、木登り、崖登り、小川遊び、火起こし、生き物探し、のこぎり体験などができます。プログラムの時間に自然との関わり方について伝えることで、自由に遊ぶ時間の学びがより深くなると考えています。

インストラクターは園児と一緒に遊びながら、木登りの場面であれば「木の手触りはどう？」というような、子どもが感覚を使い、気付きにつながるような関わりをしています。虫が苦手な子ども、保護者、保育士の方々も、インストラクターが働きかけることで、興味を持ったり触ってみようとしたりして、心境の変化が生まれる姿が見られます。

園単位以外では、子育てサークルや市の子育て支援事業など、親子でも moricco をご利用いただいています。また、保育士向け moricco 講習会の実施、FC 今治高校里山校生のボランティア参加、近隣の保育学

#### ■ 会社紹介 ■

株式会社今治. 夢スポーツ / FC 今治

代表取締役会長 岡田 武史 / 代表取締役社長 矢野 将文

**企業理念**「次世代のため、物の豊かさより心の豊かさを大切に  
する社会創りに貢献する。」の実現のために、サッカーを  
事業の柱としながら、教育事業や健康事業、スタジアム運営、  
コミュニティ事業などの、さまざまな事業を手掛けている。

科授業実施など、これから子ども達と関わっていく  
方々が自然に触れる機会も大事にしています。

#### 【事例発表を終えて】

会場でご参加いただいた皆様には、人間が生きていくために必要なものはなにかということを経験していただきました。改めて、環境教育の重要性を感じていただけたのではないかと思います。

私達は日々、様々な形でつながってくださっている皆様の意識や行動が環境問題への取り組みとなることを目指し、各事業を実施しています。近年、子どもの成長に自然との関わりが必要だという声が大きくなる一方で、保護者・教育現場の方々の悩みは尽きないのではないのでしょうか。そんなときに、moricco を思い出していただけると幸いです。

今後も、スポーツの力を環境教育に活かすという、FC 今治だからこそできる事業を行ってまいります。

#### 【フォーラムの今後について】

自然保育や森林教育の現状や意味について様々な角度から知ることができ、非常に勉強になりました。また、サイドイベントにも参加させていただきましたが大にぎわいで、関係者のみならず一般の方も木々と教育について知り、その重要性について認識していただけたのではないかと感じました。

この動きが次へ、また次へとつながり、全国の子ども達がよりよく自然と関わることのできる環境が整っていくことを期待しております。

フォーラムに参加させていただき、ありがとうございました。

# 分科会2「森林環境教育」報告

## ～子どもたちの「環境の心」を育む森林環境教育～



愛媛大学農学部 准教授  
分科会1コーディネーター

### 鍋嶋 絵里

分科会2では、森林環境教育を軸として、特に幼児期における意義や普及を考えるために4名の方に事例発表をいただきました。幼児期の森林環境教育である森のようちえん活動は十数年前から機運が高まっていますが、活動の場となる森林の現状や森と人との関わりには様々な課題があります。そもそも森のようちえんというものが見直される背景には、私たちが森と離れている現状が大きいと言っていると思います。日本の国土の7割は森林ですが、戦後以降、拡大造林によって人工林が多くなったこと、エネルギー転換によって薪炭を使わなくなったことにより、森の存在は非常に遠くなりました。森は林業の場、というイメージが強い一方で、担い手や後継者不足などで整備しきれなくなった人工林が増え、今年度からは森林整備のための森林環境税も導入されています。このような背景に対し、ドイツの事例（寺下氏）、森のようちえん（吉村氏）、林業（井部氏）、行政（横田氏）と非常に多角的な視点からお話をご提供いただくことができました。

事例発表および議論の中で浮かび上がったのは、以下のキーワード「時間軸、原風景、非認知能力、連携」でした。

(1) **時間軸**：森も子どもも成長には長い時間がかかります。一方で、常に変化し続けてもいます。このような時間軸の中で子どもとどう関わるかは、森林環境教育にとって重要なことのひとつと言えるでしょう。子どもは発達段階に応じてできることが大きく変わっていきませんが、森などの自然の中には感じる材料がたくさんあり、その子のタイミングで好きなときにチャレンジできるというお話がありました。また、林業も息の長い作業であり、森林環境教育と類似性があることなど、時間軸に関連した森と幼児教育の親和性というものが共通点として議論にあがりました。

(2) **原風景・非認知能力**：どちらも目に見えないものですが、人生の豊かさとも言えるかもしれません。例えば、詩を読んだときにどのような風景が思い浮かぶかという問いかけがありました。そこに広がりを感じる心の豊かさ、どれだけの自然や原風景を自分の中に持っているか、ということは確かに人生の豊かさにつながるのではないかと感じます。お話の中で、森での活動を通じて子どもたちがどんな工夫をこらすか、

そのプロセスでどんな表情を見せるかについて、写真や動画を交えてご紹介いただきました。非認知能力とも呼ばれますが、このような言葉にならない何かが、自然の中で子どもたちの中に積み上げられていく大切さを感じました。

(3) **連携**：「森と人との関わり」においてドイツは先進国のイメージですが、人々の意識が勝手に変わったわけではなく、林業や森林の関係者が一生懸命伝える努力をしてきたというお話がありました。ドイツでも、産業革命などを通じて森と人との関わりが希薄になった経緯がありますが、みんなが森について知らないというところから、伝える・知ることに重点を置くと連携の大切さが見えてきます。ドイツの森林環境教育では、専門家、教育関係者、行政などが役割を認識してうまく連携しているということです。日本についても、森と人との関わりは希薄であり、森はよくわからない存在となっています。森林という場で環境教育を実践するには、教育者だけでなく森の専門家や行政などとの連携が重要になってくるでしょう。発表の中でも、森林環境教育に関連した様々な連携が紹介されました。

(1)と(2)は森林環境教育の意義にあたると思います。(3)の連携は、森林環境教育の普及にあたって、今後最も重要な課題ではないでしょうか。愛媛県においても人工林が6割を占め、森は人から遠い存在となり、森があっても所有者がわからない（あるいは遠方に住んでいる）、所有者がわかっても森林が荒れていて整備が不可欠、といった現状があります。発表では、林業者の土地である人工林の一部を一般の人向けに開放し、広葉樹の森に置き換えたりするなどのプロジェクトが紹介されました。また、行政が教育関係者と連携して環境教育プログラムを構築し、継続のために企業に外部委託するといった試みも紹介されました。前者のような場の提供や創出は、使う側とうまくマッチングすれば連携が生まれます。また、それを行政が橋渡しとなってサポートすると、連携はさらにスムーズに進みます。このような連携の積み重ねによって、まさに森林環境教育の普及が促進されるのではないのでしょうか。

また、森のようちえん活動を行うことで、里山からイノシシが減ったと地元の方から言われたというお話がありました。森と人との関係は、一方通行ではなく相互作用です。子どもにとって森での自然体験がとても大切であるとともに、人が入ることで森にも影響を与える。森林環境教育を通じて、森と人との関係性が再構築される可能性を感じました。

ドイツでは環境教育のしっかりしたマニュアルがありますが、同時に地域性も重視しているというお話がありました。森も森への関わり方も、地域によって多様であり特異性があります。今後も、このようなフォーラムを各地で開催することによって、地域の連携やネットワークが開かれ、森林環境教育の普及や森と人との関係の再構築が進むことを期待します。

# パネルディスカッション

- 【パネラー（着席順）】 仙田 満（こども環境学会 代表理事）  
鍋嶋 絵里（愛媛大学農学部 准教授）  
出原 大（むぎの穂保育園 園長）  
井部 健太郎（久万造林株式会社 代表取締役）  
久保田 真依（株式会社今治 夢スポーツ しまなみアースランド インストラクター）
- 【コーディネーター】 宮林 茂幸（東京農業大学 名誉教授）



宮林氏



仙田氏



鍋嶋氏



出原氏



井部氏



久保田氏

**宮林**：これから1時間くらいパネルディスカッションということで、全体を踏まえたお話をしていきたいと思います。既に朝から分科会等で自然環境教育ないし、子どもたちが森に入る、自然に入るとはどんなに良いことかということ、様々な立場から深掘してきたと思います。そこで今日、私たちは自然にどのくらい関わっているのかということ、昔と比べるために、まず、井部さんは初めての登壇ですので、自己紹介を兼ねて、子どものころどんな遊びを自然の中でしていたかについての話をいただければありがたいです。

**井部**：皆さん、こんにちは。今は、愛媛県の久万高原町というところで、久万造林という林業の会社をやっております。まあ、昔からほんとに、スギ、ヒノキの人工林を植えて育てて、伐って売ってっていうのを明治の最初から150年くらいそれをずっとやっています。で、今五代目で、やり方は変わってるけれどもやることは変わってなくて、それをずっとやっているっていう仕事やっています。

僕は実は今久万高原町に住んでいるんですけど、幼稚園から小中高と、ここのすぐ近くの徒町（かちまち）という松山城のすぐお膝元のところでずっと育ちました。僕が、57なので40年、50年くらい前の松山市っていうのは、土もいっぱいあって緑もいっぱいあって、ほんとに昔ながらの笹笛とか笹船とかで川流したりとか、道後公園のところでザリガニ釣ったりとか、っていうのがほんとに普通のこととして、みんながそうやって遊んでいたっていうのが、僕らにとっては普通でした。今見ると、久万高原町には当時の松山の自然が残っているかなと感じています。

**宮林**：自然の中で子どもたちがザリガニを釣りながら

遊んでいる、そんな姿が見えます。でも今なかなか見ることができませんけど、仙田先生は横浜でしたっけ。横浜でどんな遊びを。

**仙田**：私は、1941年生まれです。で、太平洋戦争が始まった日に生まれたんです。だから子ども時代っていうのは、終戦後ですね。私は、生まれは保土ヶ谷という宿場町ですが、私が子どもの頃っていうのはもうほんとに周りは畑あり山ありでした。私が遊んだ場所は山の防空壕なんですね。横浜ですので、戦時中、陸軍が山の間に防空壕を掘りまして、地下軍事工場みたいなのを作ろうとしていたらしいんですけど、そこが私達の絶好のあそび場でした。

自然遊びの中では、自然は確かに美しい部分が多いのですが、真っ暗で怖いとか、あるいはヌルヌルしているとか、何か気持ち悪い部分もあります。マムシもいたし、マムシに噛まれて、同級生なんか大変な目にあったり、そういうなかでやはり、自然からどううまく危険を察知して遊ぶか、それは伝承なんですよ。年長の子供から年少の子供に伝えられて、「あ、そこは危ない」とか、「この木はかぶれる」とか教えられていく、そういう伝承というのがとても重要で、そういう意味ではみんなで一緒に遊ぶという体験がどんどん少なくなっているということ、自然遊びがなくなっているなというところがリンクしているなという感じがしますね。

**宮林**：ありがとうございました、伝承っていう言葉がありましたけど、私たちの子どもの頃っていうのは、地域社会の中にいろいろな伝承の行事がたくさんあった。その中で子どもの役割が結構あって、そこで伝承されていた多様な学びがあった。それが自然体験、あ

## 「こどもの森づくり」の意義や推進について深掘りするパネルディスカッション

るいは文化体験という形で必然的ではなくて自然に培われていたのではないかと。これがやっぱり素晴らしい伝承につながったのではないかと思いますけど。

出原さん先ほどのお話の中でタケノコを掘ったという話を伺いましたが、やはりそういう自然の中で遊ばれたんですか。

**出原**：タケノコなどもよくしたのですが、楽しいことばかりでなく怖かった経験も当たり前になりました。これ親にも言ってないんですけど、井戸に落ちたことがありますね。死ぬかと思いました。井戸の底に落ちて、気持ち悪いし、水がぶがぶ飲んでしまい怖い経験をしました。その時居合わせたお兄ちゃんたちが、必死で助けてくれて命拾いました。

**宮林**：ありがとうございます。久保田さんどうですか。

**久保田**：先ほど聞いていて、私の中にある風景は確かにコンクリートが多いなというようなことを思っていました。住宅街で遊んでましたし。川の風景もあるんですけど、それは週末にしたり河川敷とかが遊び場所だったかと、今思い出しました。

**宮林**：ありがとうございます。自然が幼児にとっても非常に大事だということですけど、そういう遊びと教えるメカニズムというか、それを今日、仙田先生がいるいろいろなポイントでお話いただきました。まさに、遊び文化の中に色々なことを学ぶことができるそこがですね、子どもの森の大事な点だと思いますが、仙田先生どうですか、その遊びとの関連について。

**仙田**：そうなんです、子どもたちの遊びの環境がいかに人間の成長の中で大事か。ドイツでは1930年代に遊び場法という法律が作られました。公園法ではなくて、遊び場法、遊びの場所がいかに子どもたちの健全な成長のために必要かというそういう法律を作っているわけですね。また日本でも戦前には末田ますさんという、当時、今のお茶の水女子大学を卒業されてアメリカにわたって研修されて、日本で日比谷公園だとか上野公園でプレイリーダーをしてきた人たちがいたんですけど、そういう制度も戦後すぐに廃止されてしまう。日本に遊び場というものに対する重要性というものがなかなか社会的に定着しなかったというのが非常に大きいと思います。

**宮林**：戦後の近代化の中で自然の遊び場を人工物とかいうかいろんなものを開発し、整備してきました。公園の中にもブランコとかコンクリートのベンチや滑り台などを入れて、自然ではないところで遊んでいくそんな人工空間を作ってしまったのかもしれないね。仙田先生のお話の中にも、子どもの遊び場

が自然離れてなくなってきている、あるんだけど自然との関わりが全くないし、伝承との関わりはなくなってきている、というお話がありました。これからは、そのような遊びの場をどのように改善したらよいかという議論にしたいと思います。できたら、出原さんから、今いろいろご苦労されている中で、課題とか問題点などについてお話しいただきたい。

**出原**：昔は学校・幼稚園・保育園とかが終わった後の子ども社会の中に、子どもたちが異年齢で自由に遊ぶ世界があって、この中で「生きる力」を育ててきました。今の幼稚園教育要領や保育所保育指針が平成元年の時に変えられて今の教え込み・先生主導ではない、環境を通しての保育に変えようという方向性が、今から30数年前に示されたのに、30数年たっても保育実践は、全然変わっていないように思われます。むしろ状況としては悪くなっている。だから、仙田先生が（遊び場の中に）アナーキーなスペースが示されたときに、僕はもうワクワクしましたね。瓦がおいてあったりとか、木片で遊ぶとか、自然物なども思いきり使って、主体的な遊びが展開される。しかし、いまだに幼児教育の世界では、これらは危険な環境とみなされてタブー視されている。うちの園は現在認可外の園で親御さん保育方針を了解して入園しているので、直接契約の中で了解してくれてる親御さんだから全然クレームなどないんです。ところがこれ一般でやってしまうと、もう危ないだとか、そういう安全問題がいっぱい出てくると思うので、だからそこを乗り越えている事例をお聞きしたいですね。

**宮林**：久保田さん、環境教育を実践しているときに、そういう歯止めというか、こんなことやれたらいいのになんていうことなどありますか。

**久保田**：直接私たちの事業の中でやれたらいいのについていうのは浮かばなかったんですけど、ちょっと話が戻って、遊具の話ですと、しまなみアースランドは、今治市役所が作った時に、とにかく自然で、子どもたちに遊んでほしいので遊具を極力作らないという方向で作られました。morricco（もりっこ）をしている場所も森の奥で、一般の方が入れませんよといったことも、公園としての安全な整備ができない、教えていけないので、一般のお客さんには解放できないので、もちろん自然保護の観点もあったと思うんですけど、そのままの森で子どもたちが遊ぶ環境をキープできているというのがあります。

**宮林**：おそらく条例とかで定めてしまうと、どうしても安全性が一番重要視されてしまう。それをあまり削ってはいけないと思うんですけど、かといって

# パネルディスカッション

自然そのものの中の遊びの仕方っていうのは、子どもの自由度、主体性がかなりあると思うんですね。それがあからゆるなものがあると思うんです。仙田先生、遊び場づくりについてお願いいたします。

**仙田**：私は、遊具をデザインしているんですよ。遊具は必要なところには必要だと考えてます。特に小さな子ども達には必要です。ただ、自然環境というのは、遊具にはできないものがある、それは生物なんです。私達の子どもの時代にも、公園の中にジャングルジムだとかブランコだとか、そういうものはありました。それはそれで面白かったし、楽しかった。そういう人工的な遊具的な世界でも身体的な能力はある意味開発できる。だけれど、生物の生だとか死に巡り合ったり、花の美しさだとか、そういう感性的な部分というのはなかなか涵養できない。そういうところはやはり自然遊びの感性的な情緒的な、感情的な膨らませるような心の豊かさというところは大きな役割を果たしているのではないかなと思っています。

**宮林**：ありがとうございました。やはり、自然の中での遊びというのは感性などの涵養として大きな役割があるということでございます。今日は午前中に、鍋嶋先生のところで環境教育の意義という議論が進んでおります。先ほど報告ありましたけれども、自然の中に子ども達の遊びの場としての森林、森を創っていく意義というか、その辺についてはどんな感想をお持ちですか。

**鍋嶋**：そうですね、やっぱり、森が、先ほども申し上げたんですけれども、遠い存在になっているということがあると思います。森がなぜ大切かっていうところで言うと、本当にいろいろあるんですけれども、森林の多面的機能ですとか、ライフライン、グリーンインフラと言ったりするんですけれども、インフラとして防災とか、土砂災害を防いだり、水源涵養機能があったり、そういうところを忘れてしまうわけですね。そういったものを頭で聞いても、私も授業でそういう話をよくするんですが、なかなか入っていかない、やはり森林の中で体験するっていうことが一番必要だと思うので、そういう意味で、森に入るっていうことがまず大事なのかなと。

**宮林**：ありがとうございました。多様性ということで、森林の持っている面的機能、森林そのものには多様性がある。植物にも多様性があるんです。それだけに、森に入っていく、主体性をもって入っていくことで、遊びも多様性になる。つまり、先ほど遊具がなくても、作らなくていいという意味ではないけれども、なくても、その遊びの多様性っていうの

が必然に生まれてきて、その多様性の中に、創造性というか感性を育てていくところに良さがあるのではないかなと思うんです。

井部さん、井部さんの会社で、今、黄金の森づくり構想を進めているようですが、その内容についてちょっと説明していただけますか。その構想において、人をたくさん入れようとする、何か問題になることはありますか。

**井部**：久万造林株式会社は、10年ほど前から「黄金の森プロジェクト」を軸に、会社をやっています。ということかという、人工林、スギ、ヒノキがだいたい9割以上が会社の山の中にあって、でそれを徐々に50%とかに下げていって、その代わりに久万高原町に自生する、クヌギであったり、コナラであったりとかっていう樹種を一杯、育てていくっていう、多種多様な山、植物の構成にするのをやっています。それは基本的に何かというと、人があまり手をかけなくても、勝手にちゃんと木々が育つ山にまずするっていう。それは、そうすれば、おそらく100年、200年と、自然の力で育っていくだろうと。もう一つは、今までは僕らの業界の人しかそういう山に入らないんですけど、いろんな活用方法とかが今後出てくるので、できるだけいろんな人に入ってもらうって、ちょっとしたイベントやってもらっています。今のところはそこに興味がある人がくるんで、基本トラブルはないです。

**宮林**：ちょっとお聞きしたかったのは、かつて里山というのは、炭や薪生産の他に、きのこ採りや栗拾いあるいは山菜取りなどで、沢山の人が入ることをウエルカムとしていた。人をどんどん入れていた、人が関わっていたのが里山でした。今は、里山に入らないように人間を排除するような、そんな山づくりになっている。ですから、山に入ろうとすると、入ってはいけませんとか、〇〇などをしてはいけませんなどの制限がかかってしまう。つまり、かつての森は人を受け入れていたが、今はどちらかという制限して、あるいは人工林化する中で、人を入れないようになっているのではないかなと思います。今は、井部さんのところはそういうことではなく、可能な限り一般の方が入ることを良しとしています。ただ、今後ですね、森林について全く知らない方々が入って、勝手な行動をすることになると、これもまた問題になると思います。環境教育もそうですけど、こどもの森づくりなどで森に入る場合、何か指導者のような、あるいは森を守っていくルールや遊び方などについてレクチャーする組織のようなものが必要になってくるように思いますが、

## 「こどもの森づくり」の意義や推進について深掘りするパネルディスカッション

この辺については久保田さんどうお考えですか。

**久保田**：はい、おっしゃる通りだなと思います。申し込んでいただくので、森の中で遊ぶことにある程度興味を持ってきていただいている方々とはいえ、森のことを知らない方々を森の中へ案内するときに、私たちは自然保護という意味で、事業を行っている点があるので、発表にも今日は入れさせていただいたんですけども、大人の方にも守っていただくルールというのをお伝えして、森の中へ入っていただく。必ずインストラクターがついて森へ案内していく。その森のことを知っている人というのが関わりながら伝えていくというのが必要だなと私は感じています。

**宮林**：はい、仙田先生どうぞ。

**仙田**：もちろん、森もそうですし、公園というのもそうですね、やはり、私の調査ですと1970年代に比べて、だいたい2000年の公園は、利用率がだいたい10分の1くらいになっているんです。一つには公園は、子どもたちが犯罪に会う場所というふうを考えているお母さんが相当いる。でも日本はアメリカに比べると非常に安全な国なんでけどね。先ほどもお話ししましたが、日本では戦前から公園にブレイリーダーという制度があって、私はこれからは、やっぱり空間を新しく作るというよりも、やはり、そこで指導するインストラクターなり、あるいはブレイリーダーというような存在が必要で、特に自然遊びの場合にはやはりある種、こう不確実性と安全性という問題があり、そういう方々がしっかりといる必要があると思います。また、保育園、学校でも先生方、あるいは保育士さんたちが、自然の体験に拒否的でなくて、どんどん積極的に子どもたちと一緒にいる体験するということを率先していかないと、日本の子どもたちは全般的に自然体験が高まっていかないのでと思います。

**宮林**：ありがとうございます。率直に言うと、学校の先生たちにもうちょっと頑張ってくれということになるのかと思います。出原さんどうですか。

**出原**：やっぱり、学校の先生ではちょっと難しいかな。学校の先生は、やるが多すぎてなかなかできない状況でしょう。でもやはり最低限、保育者（等）が、例えば有毒植物の知識を知らなければ、「これ食べて良い」とって言われて、「良いよって」安易に言ったら、中毒症状、時に死に至るようなこともまねくこともあります。僕はそういった最低限の知識とノウハウは、しっかりインストラクターや、また保育者として持っておくべきだと思います。

**宮林**：やはり地域の森林などをよく理解している森

林インストラクターのような方の指導が必要になると思います。地域性があると思うんです。その地域のお爺さん、お婆さん、あるいは地域の方たち、井部さんなどは地域について非常に詳しいです。あそこに行くと何があるとか、危ないとか。そういう方々が、地域のリーダーになっていただくと、たいへん良いのではと思います。鍋嶋さん、どうでしょう。リーダーの必要性というのは。

**鍋嶋**：私も学生を森に連れて行くんですが、最近、なかなか山歩きが難しいという学生が増えてきます。それでもやっぱり、農学部で森林コースでは実習を大事にしているんで、2年生の後期から何回か山に入って実習を行うんですが、何回か歩いていくうちに、だいたいみんな歩けるようになってはきます。やっぱり慣れていくのはかなり大きいなと思うんですけど、慣れてきたきた学生さんがまた次の学生さんを今度は授業支援としてしてもらったりというのは可能ではあると思います。そういうシステムがすごく重要だと思います。

**宮林**：ありがとうございます。まさにこどもの森づくり、森の中での体験というのが、自らを鍛える、そういうところにも非常に役立っているということです。仙田先生どうぞ。

**仙田**：私は、大学のクラブ活動はワングルやってみました。よく天気図を書いたりしながら山歩きもやっていたんですが、自然の中で危険な時にも遭遇しました。そんな自然の体験が、ある意味、人生の荒波を乗り越える、ある種、困難さを乗り越える力を育むと思われま。山歩き、森林歩きって、非常に少年時代から青年時代にかけて、是非日本の子どもたちすべてがやっていただきたいなと思います。

**宮林**：たいへん良い提案が出てまいりました。時間もほとんどありませんので、これからの議論は、こどもの森づくり、あるいは環境教育の森づくりといったものを、どうやって推進していったらいいかについて、難しい質問だと思いますけど、鍋嶋さんから順番にお願いします。

**鍋嶋**：山を歩くってことは本当に五感を使うので、平地で立っているのとは比べ物にならない。山に、かなり部活動で体を鍛えている学生さんが来たことがあるんですが、一日作業したら無茶苦茶疲れたと言って。やっぱり不安定さっていうのが、本当に体力とはまた違うものがある。そういうところで五感を使うことによって、それぞれの子どもの発達段階で本当に良い効果があると思うんで、私も是非、何かしらそういう機会を設けたら良いと思います。

**宮林**：ありがとうございます。推進していく必要

# パネルディスカッション

性があるということでありました。出原先生。

**出原**：いわゆる、幼稚園教育要領や保育所保育指針に自然の園の中での遊びの重要性というのはたくさん書かれていて、いろんな知見で見出されたものが記されているのですが、結局、それが保育者は何となく理解しているにとどまっている。でも自然あそびの方法論的なものがなかなか見つからないとか、園によってはもうそんなことやらなくていいみたいなことで終わってしまっているようなこの辺のレベルだと思うんです。もう一つ推進されない理由は、保護者の理解。いわゆる保護者に自然の中で遊ぶ重要性が明確に伝わっていない。今日は保育関係の方がかなり多いですが、一般の保育者の方は、「そんな危ない石置くの」とかすごく言われて、結局、園では、できるだけそういう自然物は置かないみたいな傾向にあります。ですから、やはりそういうものを保護者とかにわかってもらい、そういう自然保育の需要がもっと高まってくるようなことがまず重要ではないかと思っています。

**宮林**：ありがとうございます。正にそういう保護者の皆さんのグレードを上げるというか、それが非常に重要だと思います。ありがとうございます。井部さんどうぞ。

**井部**：僕とすれば、やっぱり林業って長い時間軸でやる中で、50年、100年って続けていく中で、人間の時間軸より長いから、それは世代を超えて林業で学ぶいろんなことを伝えていくというのはとても重要なことであると思っています。で、僕は今回このフォーラムに呼んでいただいたことをきっかけに、山とか、フィールドとか、場所は僕らは提供できる立場なので、保育や幼児教育とかを教えている方々とつながっていきたい。今回をきっかけに、客席とか今回来ていただける方が、ああそうのがあったと言って、アクセスできる窓口を一つだけ作ってくると、あとの繋がりが具体的に繋がりがやすくなるんじゃないかなと思うんで、そうやって広げて繋がっていくというのが結構大事なことなんじゃないかなと思います。

**宮林**：ありがとうございます。かなり積極的な意見でありますので、今後、是非とも地域内で進めたいと思います。久保田さん、どうでしょう。

**久保田**：はい、私たちそもそもが学校ではない会社ですが、こういう事業をさせていただいています。その力はあると思っています、いろんな情報の拡散力、保育現場の方々へももちろんそうなんですけれども、それ以外の方々にもこういうことって大事なんだよというのをサッカーを窓口伝えるとか、スポーツ

を窓口伝えるということが私たちにはできると思っています。

**宮林**：是非、ご支援よろしくお願ひいたします。仙田先生、何かありますか。

**仙田**：学校で子どもたちが自殺をする子どもたちや若者たちが多、心を悩む子どもたちが多という。私は建築家だから、「もっと楽しい、わくわくするような学校を作れ」というふうに建築家達に言っています。

しかし、我々の子どもの頃と同じような兵舎型の学校だったんですね。だけれど地域で自然遊びをし、仲間と遊んで、そして様々な社会的なスキルをそこで培うことができた。今は学校しかないという状況。だから死を選んでしまう子どもたちも増えている。そういう意味ではもっともっと子どもたちの学校外の生活の中で、森を歩き、街を歩き、あるいは山を歩きという、歩き回ることによって新たな様々な体験に是非子どもたちが出会えるような社会にしていかなければと思っています。

**宮林**：ありがとうございます。時間になりました。今日のお話の中で、自然体験、あるいは自然体験教育の場をつくること。そしてそのための森づくりが非常に重要だということが明らかになりました。ただこれがどうも一過性のものであったり、あるいは広がりがまだ少ないという課題もありました。今の教育の中で子どもたちが関わっている立場って非常に大変な時期に来ている。だから積極的に原体験の場を整備して、それを幼児期においてスタートしていくことが非常に重要だというお話が最終的な収穫となりました。そういうことであるとするれば、こどもの森づくりの中には、地域づくりもあったり、農業も関係したり、地域の文化など、地域との関わりがあると思います。これを是非、子どもたちの幼児期の中に落とし込んで、日常的に体験できるような運動論に転換して、総和的に全国レベルで発展していきたい。その原点が昨年埼玉県で決議され、実装のスタートラインがこの愛媛から発信するものです。具体的には、井部さんの100年の森をどんどん使っていただくなり、久保田さんの環境教育のところをどんどん使っていくなりして、愛媛は非常に森がたくさんあって近いところにある地域性があると思いますので、これをどんどん発展させて、全国の未来を背負う子どもたちのために、そして全国のこども達にと発展することで、結局日本のため我々のためになります、そういう大きな運動論として展開していく必要があるなというふうにまとめたいと思います。

これでパネルディスカッションを閉じたいと思います。ありがとうございます。

# パネルディスカッション概要



東京農業大学 名誉教授  
宮林 茂幸

パネルディスカッション・  
コーディネーター

## はじめに

「こどもの森づくりフォーラム in えひめ」の最終プログラムとして、「こどもの森づくりの意義や推進について」と題してパネルディスカッションが開催された。パネラーは、基調講演者の（公社）こども環境教育学会代表理事仙田満氏、林業・林産業サイドから久万林業株式会社代表取締役井部健太郎氏、こども体験教育を実践しているむぎの穂保育園園長出原大氏、森林学・林業学の学識者として愛媛大学農学部准教授鍋島絵里氏、株式会社今治 夢スポーツ しまなみアースランドでこども環境教育を実践している 環境教育インストラクター久保田真依氏で、コーディネーターは東京農業大学名誉教授宮林茂幸氏によって行われた。

## 1. こどもの遊びの変化（自然型体験から人為型体験へ）

太平洋戦争が始まった日に生まれた仙田氏は、こどものころ遊んだ場所はもっぱら防空壕跡地や近隣の畑や田などのみどり空間で、楽しさや美しさ等とともに怖いところ、気持ち悪いところ、危ないところなどを、年長の子どもから教わるという体験学習が日課であった。また、久万造林の井部氏は、40年前の松山市には空き地や小川などがあって、友達と笹笛や笹船、ザリガニ採りなどが普通の遊びであった。むぎの穂の出原氏は、より高く上げようと作成した自前の風揚げ、タケノコ堀、地元（森や川）探検などで、好奇心の多い子どもは親にも言えない怖い体験をしている。環境インストラクターの久保田氏と愛媛大学の鍋島氏は時が回って住宅街育ちとなり、自然型遊びは学校の校庭や近隣公園などで、森や山には親に連れて行ってもらうというように変化している。さらに、最近では、都市化が進み空地や放課後の校庭は閉鎖され、公園よりもパソコンやスマホによる疑似体験型の遊びへと変化している。すなわち、こども遊びにおいても自然減少（自然破壊）が著しい。

## 2. こども主体による遊びから管理遊びへ

かつて子どもたちの遊びは、年長や年少など異年齢の小集団からなり、遊びの技やルールなどが子どもたちの自治によって伝承されていた。もちろんどんど焼きや鎮守様の祭りなどのお手伝いは初期の段階で大人が指導することもあったが、出原氏は、地域のこども遊びの多くはこども達の自治によって伝承され、発展していた。そこにはストレスを解消し、コミュニケーション能力や協調性あるいは耐久力や持続力などを養う自然体験学習による伝承があったと指摘。しかし、今日は地域性がなくなり、こどもの自治による空間の場は減少し、特に、異年齢が集う場は大きく縮小し、どちらかというとなんかの

管理の上に、あるいは先端情報機器における一定の規則などに縛られて遊びの場が存在するようになっている。それは規制とカリキュラムが優先する学校教育の中で自然遊び場のない日常のようだ。仙田氏は、こども遊びの場は人間の成長過程の中で重要であり、特に、自然遊びは重要といえるとした。

## 3. こどもの森づくりは地域文化の中で醸成

出原氏は、かつて学校・幼稚園・保育園などが終わった後に、地域においてこどもたちが自由に遊ぶ場があって、そこで生きる力を育んできたと指摘。それを仙田氏はアナーキーなスペースとして重視している。井部氏は、魅力的な遊びについて、山があり、坂があり、小川がりの自然環境での遊びが面白いものとした。こどもの遊びにとって地域の自然や文化が最大の遊び場であるとした。また、久保田氏は、公園整備において可能な限り地域の自然の中で遊んでほしいコンセプトとしているが、公園整備には法的規制もあるので限界もあるとした。対して仙田氏は、公園などの遊具とはデザインである。必要性に応じて整備が必要であるが、自然環境には遊具にないもの、すなわち地域特有の生物があって、それとの連続性において遊具が整備（身体能力を養う遊戯）されることで感性が養われるとした。さらに鍋島氏は、まず森に入って森に親しむことで、森の持つ多面的な機能を理解することにつながる。もっと森に入る機会をつくり、森の中での体験することが大切としている。そのような中で、井部氏は、元々の植生を活かした百年の森づくりを進めている、それは今までと違ってあまり手をかけなくても自然の力で育てゆく森づくりで、石積サークルやデッキなどを設置して多くの方が入りやすい、入ってみたい森づくりを考えているとした。かつて林業・林産業の業界人しか入っていなかった森に対して地域のより多くの方々が関わり、こども達には森遊び、植物遊びとして早くから関わる中で、自らも育み、地域の自然や森林は地域の共通財産としてみんなで守ってゆくという地域づくりコンセプトに転換している。

## おわりに

ところでこどもの森づくりは、自然遊びや森遊びなど様々な体験をとおして、前述のように人生の荒波を乗り越えるための大切な生きる力を養うことにつながる。仙田氏は、今日、少なくなった森遊び、森歩きなどの原体験を幼年時代から少年時代にかけて体験することを全国に提案したい。鍋島氏は、森を歩くことは五感を使うこととなる。こども達の発達段階でよい効果が期待できるとし、出原氏は、幼児期に原体験することの重要性を保護者等関係者の方々に理解を促し、原体験の重要性を全国の園に、こども森づくりとして推進してゆくこと。久保田氏は、教育関係者をはじめ、様々な機関でこうした森づくりや環境教育活動をもっと推進してゆきたい。井部氏は、このシンポをきっかけにより多くのこども達や市民とつながってゆきたい。とした。

以上のように、こどもの森づくりは幼児教育において極めて重要なもので、今後とも全国に推進する国民運動として発展させる方向性を示唆することで終演となった。

# 次回開催県挨拶



## 次回開催県挨拶

奈良県 環境森林部 森林環境課  
課長

吉浦 慎治



奈良県環境森林部森林環境課長の吉浦と申します。

本日はこどもの森づくりフォーラム in えひめがこのように盛大に開催されましたことを心からお慶び申し上げます。自然豊かな環境で過ごすことが子どもたちに与える影響は計り知れません。森の中で少し危ない目にあったり、毎日変わっていく自然の姿に目を輝かせたりしながら成長する経験は、子どもたちの感性を豊かにし、自分で考え工夫する力を育む土壌となります。また、普段、森林・林業に携わる私の立場からは、幼年期に森林や緑に親しむことで、将来的に森林の持つ公益的な機能や森林保全の必要性について理解を深めていただけるのではないかと期待を抱いているところです。

奈良県は、県土の8割近くを森林が占める森林県であり、古くから林業が営まれてきたところです。現在はスイスを参考にした新しい森林管理制度に基づき、森林の持つ機能を最大限に発揮させるための取り組みを実践しており、その一環として森林のレクリエーション機能強化にも取り組んでおります。多くの皆様に奈良県を訪れていただき、豊かな森林とその恵みを感じていただければと思います。

最後になりましたが、今大会の関係者の皆様に感謝を申し上げますとともに、こどもの森づくりフォーラムのより一層の発展を祈念いたしまして次期開催県からの御挨拶とさせていただきます。来年、奈良にもぜひお越しください。どうもありがとうございました。





## 閉会挨拶

林野庁 森林利用課 山村振興・緑化推進室  
室長

諏訪 幹夫



本日は、多数の方にご参加いただき、ありがとうございました。

私からの閉会の挨拶では、林野庁が環境教育とどんな関係があるのかについて、お話したいと思います。

私は今、51歳ですが、私ぐらいの世代では森林や自然の中に行くことは普通のことでした。しかし、今の若い人達にアンケートを取ると、森に行く機会がある人はとても少ない状況です。日本は、フィンランド、スウェーデンに次いで高い森林率であり、森林との物理的な距離はとても近いと言えるのですが、生活が都市化・情報化してきており、森林や自然を訪れる人が少なくなっています。つまり、物理的な距離は近いのですが、心理的には一線を引いている状況だと思います。これは、久万造林株式会社の井部さんも仰っていましたが、こんなに森林がたくさんあるのに、林業する人しか関わらないといった場所になっているのは、すごくもったいないと思っていますし、危機的な状況だとも思っています。

この状況を改善するにはどうしたらよいかと考えたとき、やはり教育が重要なのだと思っています。大人に「山に行きましょう」と言ってもなかなか行かないですが、小さい子どものうちから少し触れて、要は温暖化だとか水源の涵養だとかという機能論ではなくて、普通の生活の中で、森林や自然との距離を近づけていく、これが一番だと思っています。

今回のフォーラムでは、園庭緑化の話もありましたが、いきなり皆さんに、「子どもを森に連れて行ってください」というのは難しいと思います。

やはり、身近なところに簡単に触れられる自然がある、そういう環境に育って、将来「ちょっと森林に行ってみようかな」という考えに繋がっていくことが、一番自然な取組みだと思っています。

本日、教育関係者、保育園・幼稚園の方が多いと思いますが、そういった関係者の方々が、その一歩を我々と一緒になって担っていただければということを期待しています。

当然、皆さんだけでなく、宮林先生からもお話がありましたが、林業や森林に関わっている人たちが皆さんをサポートする、そのような取組みが広がっていくことを望んでいますし、そこに我々林野庁が関わっている意味があると思っています。

是非とも、今日の機会を契機に、このような運動が全国に広がるように我々も全力で取り組んでいきたいと思っていますし、お集まりの皆様には、今後いろいろな場所で、「自然を使っていこう」と思っただけであれば幸いです。本日は、ありがとうございました。





## むぎの穂保育園（愛媛県東温市）

森の園庭における保育実践から見たことー保育実践から自然教育の意義を問うー



むぎの穂保育園 副園長

田中 真由美

### 【取り組みの背景】

本園は2022年5月に開園した愛媛県にある認可外保育園です。「愛情深い保育」「自然教育」「主体性を育む」という教育目標を軸に保育を行っています。子どもたち一人ひとりが受け止められ愛されていると感じられる保育、豊かな自然の中で大いに心を動かすことができる保育、表現（あそび）が主体的に・自由にできる保育を目標としています。園舎から一步外に出れば自然があります。その自然の中で子どもたちがわくわくする、遊びたくなる環境をどう作っていくか、またその中で安全を確保しつつ、子ども自身が持つ力をどう支えていくか、日々検証しながら保育実践を行っています。

### 【事例① 自然物を取り込んだ砂場あそび】

- 砂場＝砂あそびだけではない  
多様な自然物を持ち込むと、あそびが広がっていく  
草木や木の枝、木の実などの自然物を、四季の変化に応じて持ち込む
- 季節を感じる / 素材に触れると五感が刺激される / 素材の違いから遊びが変化する / 手先、指先の感覚が豊かになる / 砂以外の素材（植物、木片、水、石など）を取り込むことで重さや長さなどの数量的感覚も身につく / 色彩感覚が豊かになる / 素材を見たら、何を作りたいか、どう用いるかを自ら考えていく → （創造力・思考力を養う） / 作りたいものをつくると、そこからごっこあそびへと展開することもある（想像性⇄創造性）または、作りながら展開していく中で、あそびが変化していく事もある / 共同・協同性の芽生え、異年齢の交流（大きい子どもへの憧れ、小さい子どもへの優しさの芽生え）
- ◎自然物を取り込んだ砂あそびを通して、自然物の特性・多様性を知り、多様な感覚・感性を養い、様々な学びを得られる。それは生きる力へと繋がっていく。

### 【事例② 倒木をあそび環境とすることの意味・リスク】

- 倒木の扱い → 危険個所を確認する → 安全が確保できればあそび始める → あそび中で擦り傷など小さなケガはある（大きなケガに繋がらない） → 次第に子ども自身の動きや扱いがうまくなる  
大きい子どもが小さい子どもへの配慮をする・譲り合う思いが芽生える・共に過ごす時間を楽しむ
- 倒木の役割 → 木に触れる・にのびみる / 木を渡る、登る / 木を使ってのごっこあそび / ベンチ・ベッドになる（休憩コーナー） / 木の皮を剥く  
倒木の根もとの様子を観察……蟻の巣、キノコの生育、苔の発生など
- 倒木が長期に渡って、天然の遊具となった。
- 1年3カ月に渡り遊んだ倒木が弱ってきたので倒れた部分を撤去したが、倒木は無くなった後も木登りを楽しむ姿が見られる。
- ◎倒木をあそび環境とすることで、様々な経験の中から小さな失敗をして大きな失敗をしない危険回避能力を自然と身につけていく。「児やらいの教え」（伊東忠夫の教育論1976）

### 【考察】～この経験から見えたもの～

- 草花、落ち葉、木、枝、石が子どもにとっては、全て宝物になる
- 自然物に触れる事で、五感が刺激される
- 感覚あそびを経験することで、もっと触れたい、違いを知りたいなど探求心が育っていく
- 動植物への興味関心も高まり、あそび（かかわり）を通して「命」を知る機会が得られる
- 自然の中で過ごす時間が長いと、免疫力を高める効果も見られる
- 多少の失敗も次への糧となり、前向きな気持ちになれる
- 困った時には誰かが助けてくれる（安心・信頼感）
- ◎生きる力の基盤をつくるために、自然は必要  
こうしたことから、今後も四季折々の自然を子どもたちと共に楽しめる、ゆとりある環境と時間を私たちおとなが保障していきたい。

#### ■ 園の紹介 ■

株式会社ゆりのき むぎの穂保育園  
愛媛県東温市横河原 291 - 3  
園長：出原 大



## みかんこども園（愛媛県伊予市）

「園庭を森にしたい」の思いから



認定こども園 みかんこども園  
園長

大野 京子

### 【取り組みの背景】

当時、どこの園庭も中央に広いグラウンドがあり、周りに固定遊具が配置されているのが、通常でした。しかし、「園庭を森のようにしたい」という思いが強くありました。その思いを話して、苦笑されたこともありましたが、他園を見学に行く機会があり、ワクワクしてその思いは更に強くなりました。

現在の園が、2017年に認定こども園に移行し、職員たちに園庭についての思いを話すようになりました。そこから今の園庭づくりが始まりました。

### 【園庭づくりへ】

最初にどのような園庭にしたいか、どんな木々を植えたいか……などの話から始まりました。まずドングリの木やケヤキの木を植える場所を決め、足元のクローバなどを職員で植えていきました。順調に緑化していくかと思いましたが、そこで問題が出てきました。

園庭が、もともと駐車場だったため、水はけが悪く土を掘ってみると、碎石だらけで重機でも穴を掘るのに限界がありました。何とか、何本かの木や下草を植えましたが、根を張ることができず、枯れたり倒れたり、下草も子どもが走ることで無くなったりと失敗が続きました。

そんな時に、2022年に自然遊びの研修を受け、園庭づくりをしようという機運になりました。みんなで思いを出し合い、指導もいただいて職員で色々な草花や木を植えていきました。

風が強く、日ざしの厳しい園庭で、何本かの木が枯れてしまいましたが、失敗を元にきちんと植え方や育て方を調べていきました。そうして現在は少しですが、ドングリも落ちるようになり、きれいな新緑や紅葉など季節を楽しめる園庭になりました。

### 【保育の変化】

園庭の緑化により、大きく変わったことは生き物がたくさん集まってくるようになったことです。小さな水場も作ることで、水辺の生き物も集まるようになりました。子どもたちの遊びも変化を見せ始め、虫探しや自然物を使って遊ぶことが増えました。子どもたちから「もっと虫がいっぱい来る園にしてね！」の声が出てきます。当然生き物の生死も体験し、嫌われるハチ等も集まってきます。子どもたちは、そんな中で生き物への関わり方を知り、命や自然の生き物と共存していくことを覚えてきています。

また園では、支援の必要な子や異年齢の子が関わり合いながら生活していますが、自然の中では発達の違いが気にならなくなってきます。違いを認め合い、助け合ったり、協力したりと大人の介入なしで、過ごせることが多く見られます。

自然と上手に付き合うようになり、危険な場所では慎重に動いたり、涼しい場所や暖かい場所を見つけたりと、自然と子どもたちがつながっていることを感じます。

園庭が変わることで、子どもたちの心と体の健康と発達が、変化する様子を感じることができました。木々の間で遊び、走り抜ける姿は生き生きしています。小さな取り組みですが、子どもとともに、保育者の保育や考え方も変化してくる様子も感じています。これからも、子どもも大人も安心して楽しく過ごせる環境づくりをしていきたいと思っています。

### 【感想・意見】

- 当日の時間があわただしく、分科会の発表時間も10分では、短いと感じたので、質疑応答も含め、もう少し時間にゆとりがあればいいと思います。また、分科会への参加希望の人が入れないとの声が聞かれたので、収容人数が多ければよかったです。
- 園庭を緑化することは、子どもの成長発達に良い影響を与えるが、手間やお世話などの観点から難しいと感じることも多いと思います。それらを踏まえて、小さな園や、環境に恵まれていない園でも、どう園庭づくりを進めていくかの小さなヒントがあればやってみようという意識が高まるのではないのでしょうか。
- 自治体が、もう少し協力して、関係機関等からの参加者を募ってほしいと思いました。せっかくの機会なので、共有すれば、もっと園庭づくりが進んでいくのではないのでしょうか。



## すみれ幼稚園（愛媛県松山市）



すみれ幼稚園 園長  
久木 哲

### (1) 分科会1における発表の概要

すみれ幼稚園は、認定こども園へ移行して「自然と共に、人と共に育ち合う」ことをより明確に打ち出しました。出原先生の指導のもと植栽を始めて6年目、木々は大きく成長し、夏は日陰が心地よく、秋は紅葉が美しく、落葉後の冬は陽が差し込んで温かく、春は輝くような新緑に覆われます。日々変化する命たちに囲まれ、子どもたちは毎日新しい発見に目を輝かせています。

今回は特に保育理念についてお話させていただきました。フレーベルを祖にもつ私たちキリスト教保育は、宗派を超えた普遍的な「愛」を土台としています。保育者の仕事全般、言葉や振舞い、園庭や室内環境の隅々まで、温かい愛で満ち溢れることを目指しています。愛の基礎は「自然」。それは宇宙（万物）が一つの命（体）として互いに繋がりが合っている美しい調和と言ってもよいでしょう。このことは近代民主主義教育の礎となったフレーベルも、彼の師ペスタロッチも、ルソーもモンテッソーリもシュタイナーも同様のことを語っており、いずれも教育理念全体の土台にすべきことを強調しています。すみれ幼稚園では、こういった教育史についても保育者と一緒に学んでおり、自然であることが如何に大切であるかを共有するよう努めています。

イエスは「隣人を自分自身として愛しなさい」と言われました。「なぜなら、隣人は本当にあなた自身なのだから」と。みんな一つに繋がった一つの命、一つの体です。あのミミズも私自身、オケラもアメンボも。

だから、隣人にしたことは自分にしたこと。隣人にしなかったことは、自分にしなかったこと。自然に対しても同じです。自然を愛することは自分を愛すること。自然を汚せば自分の体も精神も同じだけ汚れます。みんな一つに繋がった一つの命（神・愛）ですから。すみれ幼稚園では、自然豊かな園庭や室内環境の中で、互いに愛し合い、全てのことを大切に慈しむ心を育みたいと、日々研鑽を積んでいるところです。まだ道半ばですが、それゆえ希望をもって楽しく歩み続けています。

### (2) 当フォーラムに参加して

環境問題はもちろん、人が人間へと成長していくために絶対に欠かせないものとして、どの発表者も講師の皆さんも熱心に語られていたことが非常に印象に残りました。仙田先生の講演では、現代の子どもたちが抱えている深刻な現実から、何としても現状を変えたいとの強い情熱を感じました。出原先生は、ご自身の保育現場から、緑豊かな園庭で生き生きと活動する子どもたちの、本当に人間らしい自由で主体的な姿をたくさん見せていただきました。多くの参加者が、これからの保育の方向性と具体的なアイデアをたくさん掴まれたのではないかと思います。

### (3) フォーラムの今後について

このテーマは、教育だけでなく人間存在における根本的な課題であって、間違いなく全ての教育施設が土台としなければならないことです。しかし、日本の現状はまだまだ厳しく、SDGsといっても小手先の対応しか出来ていません。教育環境全体の課題、私たち人間生活を覆う自然環境全体の問題という意識が非常に薄いのが現実です。このフォーラムも関心の高い人だけが集まっているようでは、使命を十分に果たしているとは言えません。自分の園だけではなく、周りの多くの園にも関心を持ってもらえるよう積極的に働きかけていく、そういう熱い思いが育っていくようなフォーラムに進化してほしいと思います。



## カナン子育てプラザ21（香川県善通寺市）

一人ひとりの発見 ～園庭の小さな研究者たち～



社会福祉法人カナン福祉センター  
カナン子育てプラザ21 園長  
伊禮 知代

### 概要

当園の、社会福祉法人カナン福祉センターは1967年に高松市でカナン保育園を開園しました。現在法人はカナン保育園・カナン子育てプラザ21・カナン十河こども園の3施設を運営しています。カナン子育てプラザ21は香川県善通寺市より2002年に公設民営での委託運営が始まり、2020年に幼保連携型認定こども園に移行し現在に至っています。

2023年までは広い園庭の真ん中に大きな築山があり、その周りに砂場や0.1.2歳用の小さい滑り台がありました。3歳以上の子どもたちは広い園庭に飛び出して力いっぱい走り回る姿がありましたが、転倒や擦過傷、子ども同士の衝突による打撲がありました。

一方0.1.2歳児は、広い園庭のどこまでも探索をするので保育者が把握する事が大変なうえ、3.4.5歳児が力いっぱい走っている中に未満児の歩き初めやハイハイの子どもが混在し、安全の面でも不安がありました。また、3歳以上児の子どもたちにとっては、思いっきり走りたいのに走れない、動きが止まる、砂場でのダムづくり、泥団子づくり等、じっくりと取り組みたい時に好奇心だけで突き進む未満児が触って壊れてしまう事もありました。保育者間で何度も話し合いを重ね園庭改造に取り組みましたが、どのように園庭を変えていけば良いのか暗礁に乗り上げました。

そこで、むぎの穂保育園の出原大先生の指導のもと、植栽で3.4.5歳児と0.1.2歳児の園庭をゆるやかに分けるアイデアを頂きました。大きな改革でしたので本当に出来るのか不安でしたが、出原先生の「大丈夫、来年には緑いっぱいの園庭になりますよ」の言葉を信じ進む事にし、保護者にも協力して頂き園庭改造を行い、植栽で緩やかに仕切られた緑豊かな自然に囲まれた園庭に替える事が出来ました。

改造後の園庭でのこどもたちの姿は、0歳児は何か

を見つけたら安全なところをハイハイして近づいていき心ゆくまでさまざまな物に触れ出会いを深めています。1.2歳児では、緑が増え虫も増えたので、草むらの中に隠れている虫をじっくりと見て探す姿や、園庭の草花・木のみ等『なんだろう?』と心が動いた時には実際に手で触れ、匂いを嗅ぐ、時には味わう機会が増えました。

また、子どもたちがやってみたいと思い始めたことに保育者も、子ども自身が「もう、いい」と納得するまで向き合う時間を保障する事が出来るようになりました。

3.4.5歳児は園庭にある自然を遊びに取り込み、素敵なアクセサリ・ままごとの材料・色染めなどの実験の素材・たくさんの木のみを集めて満足し心を満たす等々、一人ひとりの遊びが展開されています。そして、子どもだけではなく保育者である大人も自然の中で癒され、もっと居心地の良い園庭にしたいと園庭への愛情が生まれています。草花のために柔らかい良い土にしたいとの思いから、子どもと共に園庭の落ち葉や給食の野菜の切れ端での土づくりが始まりました。野菜くずや落ち葉が毎日変化する様子、醗酵して暖かい土の感覚、たくさんの驚きと発見を経験しています。これからも子どもたちと共に花や野菜・果物・土を育てながら自然豊かな園庭で心も身体も豊かに成長する姿を見られることに喜びを感じています。

### 感想

フォーラムに参加させて頂いたことによって、子どもにとって幼少期から自然の中に身を置くことがいかに大切であるのかという事をそれぞれの立場の事例を通して改めて深く知る事ができました。また、子どもを森（自然）に戻すために教育・保育関係者だけではなく、地元の企業、林業関係者等多くの方が関心を持っておられる事を知りました。保育の狭い世界だけで考えるのではなく広い視野を持ち、さまざまな分野の方と協力して子どもにとって最善の環境を考え作り続けたいと思いました。

### フォーラムの今後についての意見

まだまだ、子どもにとって自然の中で育つことの意味が知られていないと感じています。このフォーラムを通してより多くの人に知られる事によって、子どもと自然に対するの価値観が高められ、これから生きていく子どもたちにとって自然との共存が当たり前となってほしいと思います。これが教育です。



## 愛媛大学農学部

ドイツで考えるもりとひと



愛媛大学農学部  
准教授

寺下 太郎

### 1 ドイツ人と森との関わり

ドイツ人にとって森は様々な様相を持つ。たとえば「赤ずきん」、「白雪姫」、そして「ヘンゼルとグレーテル」。赤ずきんは「森」を通るが故に狼に食べられる。白雪姫を殺すよう命じられるのは森の民である「猟師」。ヘンゼルとグレーテルの親はこどもを捨てるが、それは彼が貧乏な「きこり」だから。森の中で待ち構えるのはこどもを食べようとする悪い「魔女」。こうした物語を聞かされるこどもたちは森に対して、また森での生業に対して、どのようなイメージを持つだろう。

森に怯える農村部に対して、都市部はまた別。都市の中心には王侯貴族がいて、彼らの趣味に狩猟があり、獲物の棲む森を必要とする。その王侯貴族の森だったものが、やがてひとつの森となり、都会住民だからこそ森に親しむという構図が見られる。

また、時代が進むと第二次産業が発達し、本格的な森の荒廃が人の手によって生じる。しかし、だからこそ、人の手で森を育てていかなければならないという意識が芽生える。森林生態系は原生自然植生からモノカルチャーの針葉樹林へと変化していく。工業化が進むと、資源として森が収奪されるだけでなく、大気汚染によって樹が枯れ、さらに温暖化ガスによって気候が不安定になる。すると生長や生産性を重視するモノカルチャーよりも、生態系としての抵抗力のある針広混交林が志向される。同時に「人が森を守る」に対して「(二酸化炭素吸収源の)森が人を守る」という関係が新たに見出されていく。

### 2 森林文化はひとが作る

ドイツではフォレストラーが憧れの職業、とよく言われる。しかしこれをゲルマン魂とかDNAなどで説明してはならない。林業が不人気だった時期はドイツにもあったが、林業の良さをアピールして、志望者を増やすことができた。ドイツで森と人の良い関係が心ある人たちの啓蒙活動によって浸透したのであれば、日本でもそれは可能なはず。

同じことが自然保護活動にも言える。自分の周辺の自然が脅かされることに対して、専門家や行政にまかせるのではなく、市民自身が保護活動を始め、そして

それが効果を上げていく。

林業にも自然保護活動にも共通するのは、当事者意識である。これは大事なことで、これは公共的なことで、これは行政の責任だ、と、いつのまにかその活動主体であることを手放してしまうと、勢いがなくなる。このパラドックスをドイツ人も経験している。

### 3 森と人との関わりを考えるヒント

つまり、森と人の関わりは図式的・静的ではなく、物語的・動的なのだ。これを踏まえて、森と人との関わりを考える枠組みをふたつ挙げる。

- 1) まず、「森」と「森で受け入れる人(すなわち私たち)」と「森を訪れる人」を各頂点とする三角形。森と何か、私たちは何者か、誰が森を訪れるのか。3つの頂点をはっきりイメージすれば、次はこの三角形の辺にあたる「森と私たち」、「私たちと森に来る人」、「森と森に来る人」の関係性についても見えてくる。そうすればおのずとなすべきことも見えてくる。
- 2) そして、個性と連携の両立。教える専門家と森の専門家、両者の個性・専門性を重視しつつ、連携をしていく。また、おとなとして教育・啓発するのではなく、みずからがこどもと同じ視点に立ってアクティブな好奇心を持つ。全ての立場の相互の学び合いが求められている。

### フォーラムの感想

- サイドイベントは一日たっぷり時間を取って、けれどプログラムをぎちぎちに詰めるのではなく、いつでもおいで、という形になっていたのがよかった。その結果、先に来たこどもたちが後からくるこどもたち・おとなたちをガイドする循環ができていたのはおもしろかった。他方、アクセスするのに各自の自家用車でなければというのは排気ガスがかさむ。シャトルバスやライドシェアのコーディネートがあればと思う。
- 分科会は会場のサイズ感も時間配分も個別のテーマを話し合うのに適切だった。また、分科会後に話し手と聞き手の垣根が取り払われて話せるフランクな雰囲気になだらかにできていたのがよかった。こうした対話を続けられる別会場、休憩所的なものを設けてもいいかもしれない。分科会の数自体もこれからはもっと増えるといいと思う。
- フォーラムはやはり登壇者の魅力に圧倒された。やってきたこと(経験)、やれること(能力)も大切だが、人柄や考え方が何より人を惹きつけることがわかった。他方、会場が真っ暗になっていたのでメモが取れなかったことと託児などの対応がなかったことが残念であった。妄想を膨らませるなら、託児というある種「おとなのためのサービス」にとどまらない、おとながフォーラムに参加している間こどもも別枠で楽しむという構成にして、そしてそれぞれが家に持ち帰って一日を振り返るといった形になれば面白いかなと思った。



## えひめ自然保育連盟

### えひめ自然保育連盟の活動紹介



えひめ自然保育連盟理事  
NPO法人ツナガルにはま  
理事長

吉村 尚子

#### 【えひめ自然保育連盟の紹介】

自然の営みに寄り添い、自然とつながる生活や文化を基軸にした保育・幼児教育（＝自然保育）の普及・推進を目的とした組織です。2023年8月、愛媛県内で自然保育に取り組む団体が連携して発足しました。愛媛県の東予中予南予エリアにそれぞれ自然保育を提供している団体があります。お近くの団体にアクセスしてみてください。

#### 【原体験を持つことの意義】

原体験とは、五感を重視した直接体験です。どうしてもそれらが必要なのか具体例を交えながら2つの観点から、お話をさせていただきます。

##### （1）感覚共有

現存する日本最古の物語ってなんでしょう？答えは、『竹取物語』です。どんなお話か覚えているでしょうか。古今和歌集にも「木にもあらぬ草にもあらぬ竹のよの端にわが身はなりぬべらなり」と詠まれた竹。日本人にはとても馴染み深い植物です。竹かんむりの漢字の多さや、竹を使った慣用表現が多いことから竹が日本人に愛されていることは想像に難くありません。竹林に入って上を眺めると、まっすぐに伸びた青い竹が天に向かってのびています。風が吹くと葉がざざめき、時には竹同士が音を立て合う。そんな中で、竹の節の間にかくや姫を見出した日本人の感性。竹林に入ったことのある方は、その神秘性が体に記憶されていることでしょうか。萩原朔太郎の『竹』という詩もぜひ読んでみてください。さて、私が高校で教鞭をとっていた頃、『竹取物語』を古典で学習する高校生に「竹林に入ったことがあるか」尋ねたことがあります。経験者はゼロでした。子どもの森づくりフォーラムの分

科会場で同じ質問をしてみると、ほとんどの方が竹林に入った経験をお持ちでした。竹林の音や、雰囲気、かくや姫が潜んでいそうな空気感、どちらの集団により深く話が伝わるでしょうか。今一生懸命に竹の話をしていますが、実際に竹を見たこともない人達にいくらこの話をしても、伝わるものはほんの少し。竹ひとつとっても、五感を使った原体験をしているかということは、人と感覚を共有するうえで、とても意義のあることなのです。

##### （2）感覚統合

全身の感覚器官から得られる情報を脳が整理して適切に反応する機能のことです。自然の中にある、あらゆる段階のものが、発達を自然と助けます。子ども達が今の自分の体に必要な感覚を選び取っていきます。今回は、森の日常から子どもたちが得ている感覚を写真でご紹介しました。「ながい」「みじかい」「たかい」「びったり」「さむい」「ぎゅうぎゅう」などなど21の感覚を集めました。複雑な自然の中だからこそ、複雑に感覚が反応し、それを一つにまとめる脳がフル回転します。レイチェル・カーソンの書いた『沈黙の春』の一節に、「It is not half so important to know as to feel. 知ることは感じることの半分も重要ではない。」とあります。幼少期に、感じる体験をたくさん重ね、豊かな人生を送る礎を築くことが肝要です。

#### 【自然保育のススメ】

自然界に、同じ日は1日としてありません。気温も風も鳥のさえずりもお日様の光も草のゆらぎも花の咲き具合も、何もかもが昨日とは違います。変化の中に身を置くからこそ、変化に気が付くことができます。五感をしっかり働かせて育った子どもの創造力や想像力は目を見張るものがあります。豊かな人生を歩むためにも、根っこをしっかり育てるためにも、一人でも多くの子ども達に、自然体験をと願ってやみません。

#### 【フォーラムに参加して】

自然保育というキーワードで集まった愛媛県内の人々につながりが生まれ、今後の活動の展開に広がりが見出せました。点だった活動が、線になり面になっていく実感を得られたことは今後の活動のエネルギーになりました。自然豊かな愛媛県自然保育の発展の一助を担えるよう邁進したいと思います。



# 久万造林株式会社 黄金の森プロジェクト

久万造林株式会社  
代表取締役 井部 健太郎



### プロジェクトの目的

100年、200年と「健康な山」が継承されるために

#### 「新しい林業のかたち」始まりました

スギ・ヒノキの人工林を切ったあとの山が新しいワールドに生まれ変わる。

**「木のシアワセ視点」で林業を再構築**

木が健康、動物がストレスなく自然の中で生きていく。健康な山で生きているのは「シアワセ」だと考えたのが始まりです。そんな山で新しい林業のかたちをスタートアップで実践していきます。

**樹種の多様性、関わる人の多様性で実現**

本プロジェクトは単年での採伐から多様な樹種を育てることに挑戦しています。また、地域の人材を育て、雇用創出を図ります。多様な人材が集まることで、新しい林業のかたちを実現していきます。

### これまでの林業。それゆえの課題。

林業のまち「久万高原」は、変化と対応が求められている。

**1 変遷する久万高原町の林業**

- 昭和30年代からスギ・ヒノキの単種林が主流。
- 固定された林業の人工林。
- 固定された林業の単年での採伐。40%を輸入している。

**2 木材業界のいま**

- 多額の伐採コスト削減により、森林のメンテナンスが滞りつつある。
- 伐採に高いコストがかかる人工林に比べて、自然林の伐採コストは低く、利益も大きい。
- 伐採（丸太）を加工する製材所は、年々閉鎖し、大産地によって、森林経営が難しくなっている。
- 伐採に高いコストがかかる人工林に比べて、自然林の伐採コストは低く、利益も大きい。
- それでも、高付で生きた木は（主に建築用材向け）は、価格も高くない。山から採出して出回らない。
- 丸太材（日本の木）の価格は高いが、山から採出して出回らない。

**3 山側の問題**

- 森林経営者の高齢化や世代交代によって、山に働く人が減少し、放棄山林が増加。
- 自然林で人工林では、伐採コストがかかる。経営が難しい。
- 間伐や伐採などのコストも高くない。
- いろいろな採伐方法（伐採方法や時期）が選べる。
- 薪（丸太）の固定システムから多様な用途に活用している。

### 新しい林業の考え方とは

次の世代につなぐ、多様な人材と一緒につなぐ

**「自然環境を優先する」**

- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。
- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。

**「時間軸を考える」**

- 自然環境、人の健康にも優しいように育てる。
- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。

**「山と人が共存する」**

- 多様な人材を集めて、山と人が共存する。
- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。

### 木のシアワセ視点とは

たくさんの仲間がいて、見守ってもらい、育んでいる人たちも幸せ

**A 自然環境を優先する**

**B 自然環境を優先する**

**C 自然環境を優先する**

**D 自然環境を優先する**

**E 自然環境を優先する**

### 新しい林業の実現イメージ

「木がシアワセ」だと、森に憩える人も幸せ。森全体をキラキラと黄金のように輝かせる。

**黄金の森プロジェクト**

久万造林株式会社

100年200年と健康な山を継承する

### プロジェクトのスケジュール

森づくり、森林の活用、人材育成まで

～2021年～ 2026年まで

**準備期間**

- 林業の現場で現場を視察し、現場での「現場見学」をスタート。
- スタートアップに必要な人材を募集し、スタートアップチームを構築する。

**STEP1 自然環境を優先した多様性のある森づくり**

- 人工林を伐採し、自然林を育てる。自然林の伐採コストは低く、利益も大きい。
- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。

**STEP2 多様な森林活用**

- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。
- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。

**STEP3 人を育てる**

- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。
- 自然環境を優先して林業を営む。できる限り自然のままに育てる。

### エリアごとにプロジェクトを展開

3つのパターンで、エリアごとに「黄金の森」化を推進

※2021年から下記のパターンを、場所及び内容（種別・レイアウト等）を少しずつ変えながら繰り返していく

**Aエリアパターン**

**Bエリアパターン**

**Cエリアパターン**



## 徳島県那賀町役場

### 那賀町の木育・森林環境教育



#### 那賀町林業振興課

#### 横田 泰宏

徳島県南部に位置する那賀町は、およそ700km<sup>2</sup>の面積があり、95%が森林です。そのほとんどが人工林、温暖で多雨な気候柄、杉の成長に適した地として林業が古くから町の基幹産業になっています。しかしながら、那賀町も全国的な流れと同様に、材価の下落による生産量の低下、それに伴う担い手の減少により、森林整備もおぼつかない状況となっていました。そこで、那賀町は素材生産量の増加、担い手確保、木材利用の促進などを目指して林業振興を徳島県と共に、平成17年度から取り組んで来ました。こうした背景のもと、平成28年度末から那賀町は、公的に木育・森林環境教育を推進することとしました。現在町では森林環境譲与税を財源に以下3つの事業を主に進めています。

#### ①那賀町-北島町連携協定に基づく取り組み

令和元年度から始まる森林環境譲与税の分与に合わせ平成30年度に、素材生産のまち那賀町と木材消費のまち北島町（徳島県内の町）は、森林整備や木材利用普及啓発を共に進めるため連携協定を結びました。これに基づいて、令和元年度から、那賀町と北島町のファミリーを対象にした一般参加型の木育ツアーを開催しており、森林観察会や、木の特徴にフォーカスを当てて違いを楽しむなど、参加者に森や木に興味を持っていただけるよう毎年工夫を凝らしています。

#### ②那賀町山のおもちゃ美術館の外遊び

那賀町は、町内を始めとした徳島県南域の木育・森林環境教育拠点として令和4年度末に那賀町山のおもちゃ美術館を開設しました。多世代交流、地域の魅力発信、遊びの創造を提供するなか、ボランティアスタッフとして元教員や製材所関係者、現役森林組合員など様々なバックグラウンドを持った方々に助力を頂いております。美術館の開館に合わせて、指定管理のスタッ

フ、ボランティアスタッフ向けに森林環境教育プログラムLEAFの研修を行っており、これを基にして、町内外の保育小学校の遠足、社会福祉協議会やこども食堂との連携、ボランティアスタッフ提供イベントなど、裏山の森林文化公園を活用した外遊びを広めるよう努めています。

#### ③小学校での教育カリキュラムの作成と実施

事業開始当初、こども園では野外で自然を楽しむ一方、小中学校では、ほとんどそうしたことがなされていませんでした。そこで、町内の林産業従事者育成の学科がある那賀高校を目指す子どもを増やすため、小学校をターゲットにしました。とは言っても何をやっていいのやら……、とにかく学校の先生方に何かできないか伺い、出来る限り実施しました。そんななか、限られた時間で効果を上げるには、体系的なカリキュラムが必要と思い、また職員移動による事業停滞の懸念もあって、山のおもちゃ美術館の木育・森林環境教育のサポートも含めて令和5年度からノウハウ蓄積と継続性を担保するため、外部委託に踏切りました。

そうして、管内の小学校の先生方に助言を頂きながら、森林に親しみを持つ段階から森林を大切に思えるステップアップを盛り込んだカリキュラム（木育カタログと呼んでいます）を作成しました。まだまだ未完成ですが、木育カタログにより、町内でもこれまでほぼ要望がなかった小学校からオファーを受けられるようになってきました。

将来的には、山のおもちゃ美術館を中心に林産業、学校関係者などと連携しながら、小学校のみならず森林環境教育をこども園から中学校へ浸透させると共に、より使いやすくなるよう森林文化公園を整備し、町内外のこども等を始め多世代の方が森林を楽しむコミュニティを作りたいと考えております。

これまで手探り状態で森林環境教育を展開してきたところ、こどもの森づくりフォーラムの運営者や講師の皆様と出会えたことは大変幸運だったと思います。志高く取り組んでいる方々がこれだけいるのかと、視界が一気に広がった思いで、今後とも皆様と繋がりを大切に、子ども達に印象深く森林環境と林業の大事さが伝えられるようにしたいと思います。また、当フォーラムが人の輪を広げるハブとなるよう末永く開催され、一人でも多く森に親しみ大切に思う子ども達が増えてゆけばと期待しております。

## 『森の“ナバ～らんど”』 ～キャンプ場が森の自由な遊び場に変身～

- 日時** 2024年11月30日(土) 10:00～15:00
- 会場** 「えひめ森林公園」 愛媛県伊予市上三谷齒朶谷
- 運営** 愛媛県 えひめ自然保育連盟 (※注)
- 講師** 岐阜県立森林文化アカデミー 教授 萩原・ナバ・裕作氏 (写真右)
- 参加者総数** 457人



(※注) えひめ自然保育連盟 運営参加団体  
ノヤマカンパニー、ゆずはら森のおさんぼ会、ツナガルにはま、みんなダイスキ松山冒険遊び場、西条森のようちえんおむすび



### サイドイベント「森林体験」運営担当レポート

えひめ自然保育連盟 代表 山本 良子

今回の子どもの森づくりフォーラムでは伊予市えひめ森林公園にて、サイドイベントとして「岐阜県立森林文化アカデミー」の萩原・ナバ・裕作さんに講師として来ていただき、「森のナバ～らんど」を開催しました。活動内容としては草木染、火起こし体験、木工体験、まきまきパン作り、プレーパーク、モンキーロープや落ち葉プール、枝を使った遊びの広場など、子どもたちの遊びを引き出すシチュエーションを子どもたちと共に作り上げていくことができました。

私自身は4人の子どもを育てながら森のようちえんを愛媛に広める活動を2006年から開始し、現在は年間通じて森のようちえん、自然体験活動、フリースクール、キャンプ、プレーパークなどを実施しています。

森で活動する中で多くの子どもたちとも出会ってきました。森の中で自由に遊べる環境があるだけで、子どもはさまざまな遊びを創造し、仲間と共に何も無いところから遊びを作り上げていきます。秘密基地を作りリアル鬼ごっこに発展したり、木工広場では弓矢や剣をオリジナルで作って、世界で一つだけの自分だけの武器を作るのが子どもたちの人気の遊びになったこともありました。また森探検をしたときには子どもたちがタケノコを収穫して子どもたちが企画して行商を始めたりと、遊びは常に変化していました。

そして自然の中で遊び込んで育っていった子どもたちもたくさん見てきました。子ども時代にしっかり遊び込む中で喜怒哀楽を日々経験しながら、友達に助けられたり助けってもらったりする中で、他人との距離感を学び、「やりたいことを行動に移す」ことに躊躇することが減り、自分の人生を自分で切り開く楽しさに目覚めていきます。そしてその子どもの育ちのプロセスを温かく見守ってくれるさまざまな関係性の大人の存在もとても大切だと感じてきました。

社会が希薄化する中で、そうした環境が子どもの生きる社会には少なくなってきたけれど、子どもの健やかな成長に必要なものは、子どもがのびのびと遊び込める身近な自然があることと、温かく見守ってくれる多様な大人の存在ではないかと思っています。

今後も子どもたちの未来が明るいものとなるために、自然とつながる生活や文化を基軸にした保育・幼児教育の普及および推進に努めていきたいと思っています。

#### ■ えひめ自然保育連盟 ■

えひめ自然保育連盟は自然の営みに寄り添い、自然とつながる生活や文化を基軸にした保育・幼児教育の普及および推進を、愛媛県内の活動団体との連携のもと行うことを目的に2023年8月に設立されました。

## ワクワク木あそび場

- 日時** 2024年11月30日(土) 10:00～15:00
- 会場** 「えひめこどもの城」愛媛県松山市西野町乙108番地1
- 運営** 愛媛県
- 講師** 株式会社大五木材 高橋 佐智子氏(写真右)
- 参加者総数** 450人



### 「木育講座」講師レポート

大五木材 高橋 佐智子

今回、こどもの森づくりフォーラムのサイドイベントで木育講座を担当させて頂いてありがとうございました。木はあったかい・癒されるといった情緒受け身的な感想にとどまらずその先の自発的な動きが生まれるような空間にしたい！木は面白い！！を体感して欲しいと願い県職員の方とも共有し準備しました。

- 様々な年代が集い、一緒に、夢中になって笑い合う。
- 五感を使い脳も活性化させ、コミュニケーションツールにもなる木のモノを様々な用意し、木材のイメージを広げる。
- 「木は使いやすい」を実感してもらうように手軽で簡単な作る場を設ける。

(完成形に進む製作ではなく、創造・想像を楽しむアート感覚で)

実際には、愛媛県内25か所以上に点在する「木の球プール」をはじめ、全身で木材を感じるもの、チャレンジ、対戦、コミュニティ、創造等・各種。さらに、「童具館」のWAKU-BLOCKも40人分用意し、中途半端ではなく思う存分！を目指しました。結果とし

て、子どもに限らず、大人も一緒になって、心身がほぐれ、笑い合う、楽しい木遊びの空間、時間になったようでほっとしました。

まずは、目にして香りをかぎ、音を耳にし、ふれた。面白くなって、夢中になってた。時間がすぎ、満足した。あちこちゆるんできた。各自の楽しかった！という思いの中のどこかに木の感触が残って、木の絵本等、自分と森林とのつながりの見える化もあいまって、一人一人の心の中に森づくりの種まきをしたつもりです。今はいつかどこかで芽がでることを祈っています。

今回、様々な立場の人が集い、語るのをきいて、まさに今、自然のとりこみ方を皆が再考して、急がば回れで、できることから始めることが山の循環を次世代につなぐ何よりの力だろう、と強く思いました。

山づくり、子育て、共に根っこが伸びやすいふかふかの環境、土づくりの始まりです。足元は、踏み固めるのではなく、やわらかくほぐす。これから、フォーラムではそんな思いを共有できるといいなと思います。

- 日時** 2024年11月30日(土) 9:30～16:00
- 運営** NPO 法人子どもの森づくり推進ネットワーク
- 講師** むぎの穂保育園 園長 出原 大氏  
国際校庭園庭連合日本支部 代表 仙田 考氏
- 参加者** 31名



## 実施スケジュール



- **時間** 10:00
- **場所** すみれ幼稚園(松山市) 久木園長
- **訪問保育園の特長**  
豊かな園庭環境の中で、日々の保育の中に自然の体験が組み込まれている。

- **時間** 11:30
- **場所** むぎの穂保育園(東温市) 出原園長
- **訪問保育園の特長**  
出原園長が、理想の自然保育を実践するために愛媛に開園した緑豊かな園庭の保育園。



- **時間** 12:15
- **場所** 「利楽」(東温市)
- 東温市にある温浴施設でむぎの穂保育園の出原園長による講演会を開催。  
※東温市長様から、ウエルカムご挨拶を賜る。

- **時間** 14:30
- **場所** 大護さとやま認定こども園(松山市)  
田中園長
- **訪問保育園の特長**  
圧倒されるほどの広大な園裏山の自然環境を活用した積極的な自然保育に取り組んでいる。



**日時** 2024年12月1日(日) 11:30～16:15

**会場** 松山市民会館 中ホールロビー

## 展示団体

開催地	愛媛県 松山市 伊予市	
協賛団体	特別協賛	(公財) イオン環境財団
	一般協賛	(一社) 日本森林技術協会
実行委員会	林野庁 (公社) 国土緑化推進機構 (公財) ニッセイ緑の財団 (特非) 子どもの森づくり推進ネットワーク	
次回開催県	奈良県	
連携団体	えひめ自然保育連盟	

「こどもの森づくりフォーラム in えひめ」の開催に関わっていただいた組織や団体の活動をご紹介します。開催地の県や市町をはじめ、保育・幼児教育関係や森林・林業関係、さらにご協賛団体や活動支援団体等、多様な関係の方々にご出展いただきました。

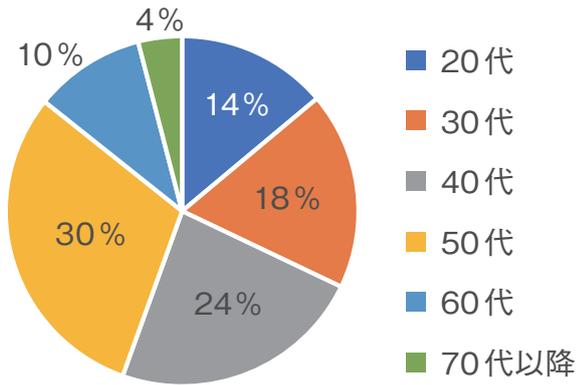
当日は、約300名を超える来場者に対して、自然保育や森林環境教育に関わる様々な取り組み情報を提供することができました。

ご出展いただきました皆様に、あらためて御礼申し上げます。

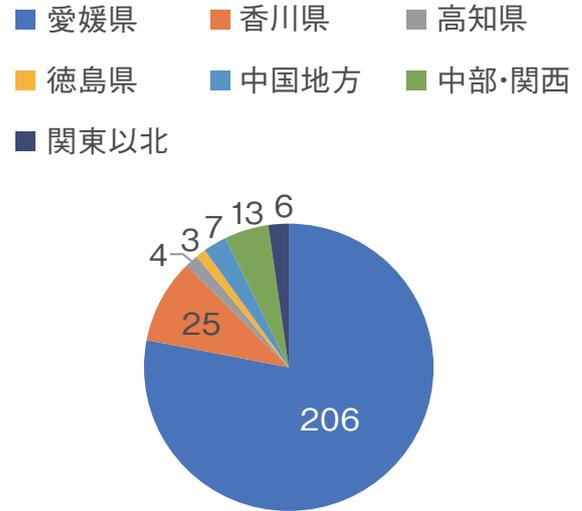


# 参加者属性 ※参加者総数：266名 ※未回答項目あり

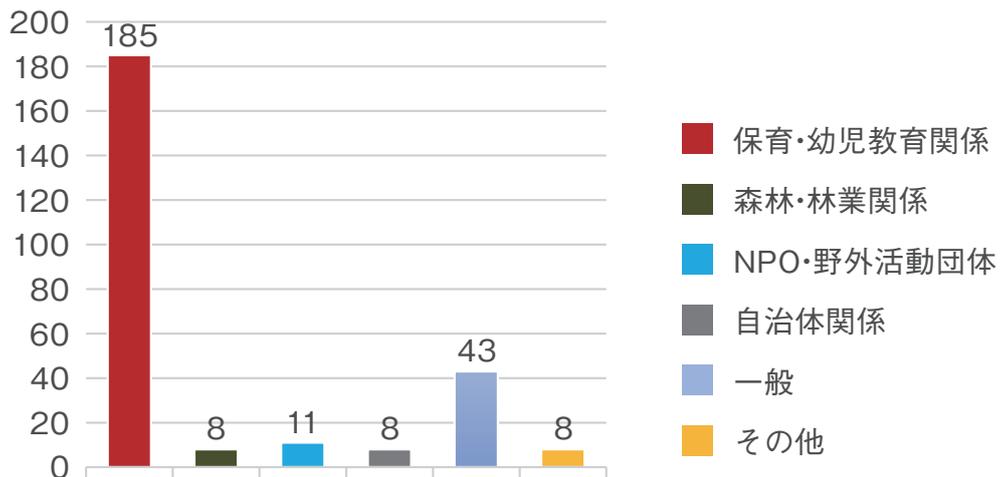
## 参加者年代



## 参加者居住エリア



## 参加者所属



# アンケート（参加者からのご意見）

こどもの森づくりフォーラム実行委員会事務局では、今後の運営の参考にさせていただきたいと思い、参加者にフォーラム全体に関するアンケート（自由記述）をお願いしました。おかげ様で、約40を超える貴重なご意見をお送りいただきました。下記に、その一部をご紹介します。なお、その他のご意見は、ホームページに掲載させていただきます。

住所	所属	年代	ご意見
愛媛県	保育・幼児教育	50代	エクスカージョン、すごく良かったです！3園とも素敵で勉強になりました。むぎの穂の中原先生、田中先生話、とても素敵でした。奈良県にもぜひ行きたいです！
広島県	一般	70代	去年の埼玉、今年の愛媛と素晴らしいフォーラムが続きます。来年の奈良も楽しみです♪是非、お伺いしたいと思います。
大阪府	保育・幼児教育	50代	園の事業計画で園庭の改造をすすめている。あらためて森林教育の大切さを知ることができました。保育関係の方だけでなく、さまざまな業種の方からの話も参考になり、もっと聞きたいと思いました。来年は奈良で開催！と聞き、大阪からは近いので、ぜひ参加したいです。
愛媛県	自治体	50代	幼児期から自然に触れることの大切さがよく理解できました。
香川県	保育・幼児教育	40代	分科会では4園の園庭の様子をみさせていただき、参考になることばかりでした。四国にも同じ気持ちで取り組んでおられる方がたくさんいることに嬉しく思います。本当にありがとうございました。
愛媛県	森林・林業	50代	森と人との繋がりを取り戻すために、今自分にできることはなんだろうと考えるよいきっかけになりました。あたり前にやってる里山でのこと、山道をあらく、干し柿をつくるなどが、子どもたち、またおとなの発育発達にも必要で、とても役立つことを再認識できたのがよかった。
愛媛県	保育・幼児教育	20代	<ul style="list-style-type: none"> <li>分科会終了からフォーラム開始までの時間設定が短いと感じた。</li> <li>事例発表内の分科会報告は、なくて良いかと思う。分かりづらかった。</li> <li>フォーラムを午前中に実施し、分科会を午後から実施する形は検討しなかったのか。（会場の関係だけなら、勿体無い）</li> </ul>
静岡県	保育・幼児教育	40代	前回の埼玉に続き、2回目の参加となりました。今回は愛媛ということで、少し距離があったのですが、四国観光も兼ねて参加させて頂きました。子どもの森づくりフォーラムでは、自分たちと同じような自然保育をしている保育園、幼稚園、森のようちえんの方のお話が聞けて、毎回とても参考になります。
愛媛県	保育・幼児教育	60代	フォーラムの中で、分科会の詳細をご報告くださったのは、参加できなかった者にとって、学びになり良かったです。また、フォーラム最後のディスカッションは、それぞれの違った視点でお話くださり、とても面白く、興味深く、自然保育の必要性をより深く感じるとともに、森自体への関心度が高まりました。（山間部に住んでいる私にとって、地域住民、社会が、入らざる森、手付かずの森にしている現実寂しさを感じています。）最後に、さすがコーディネートの先生、素晴らしかったです。このような学びの機会をいただき、ありがとうございました。
岡山県	保育・幼児教育	30代	分科会1希望でしたが、満員で分科会2に参加しましたが、そちらも良かったです。更に分科会1の話を、すべてまとめて報告してくださり大変感謝でした。ありがとうございました。私の園でも園庭緑化を進めていますが、子どもたちが掘りあさったり木々が枯れたりとなかなかうまくいきません。同じ状況になっている様子もみられ、今後の参考になりました。またここでの繋がりをもちたいです。
愛媛県	一般	30代	全盲で保育士として働いたのち、現在は読み聞かせの活動を行なっているものです。自然環境教育の意義について学ぶことができ、参加できて良かったです。
香川県	保育・幼児教育	50代	他園の森づくりに関する事例を見聞きしたものを持ち帰り、さっそく職員で当園の園庭で大切にしたいことについて話し合いを行いました。ありがとうございました。
愛媛県	森林・林業	50代	分科会2に参加させていただきました。どなたも、とても興味深い内容でした。

# イオン環境財団の概要

公益財団法人イオン環境財団は「お客さまを原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献する」というイオンの基本理念のもと、岡田卓也（イオン株式会社名誉会長相談役）により日本で初めて地球環境をテーマにした企業単独の財団法人として、1990年に設立されました。以来、多様なステークホルダーの皆さまとともに、「植樹」「環境活動助成」「環境教育・共同研究」「顕彰」の4つの事業を中心に、活動に取り組んでいます。また持続可能な地域の実現を目的に、新たな里山づくりにも取り組んでいます。

## 主な事業活動

### 植樹（イオンの森づくり）



宮崎県綾町

◆累計植樹本数 **1,268万本**イオン全体

自然災害や伐採などで失われた森林の再生を目指し、ボランティアの皆さまとともに植樹を行っています。また、植樹地の自然共生サイト認定も進めています。（植樹本数は2024年2月末現在）

### 環境活動助成



助成先団体男ノ子の里（棚田保存会の活動地（福岡県）

◆累計助成団体 **3,436団体** / 累計助成金額 **31億946万円**

環境活動に積極的に取り組む非営利団体に対して、毎年総額1億円の公募助成を行っています。（2024年3月現在）

### 環境教育・共同研究



第1回 イオンSATOYAMAフォーラム

新しい里山の可能性と価値を創造するため、里山に関して連携し共同研究をしている5大学とともに、人と自然の望ましいバランスを研究し里山の新たな可能性を見出し、発信しています。

◆グローバルユースミドリプラットフォーム（GYM）

国連大学と連携し、アジアのユース世代を対象にグローバルで活躍する環境リーダーを育成しています。優秀者には国際会議の場で提言する機会を提供しています。

2024年8月に行われた「第1回国際合同研修スピーチコンテスト」の受賞者のうち2名は、10月のCOP16のサイドイベント会場で、国連大学の代表団の一員として発信しました。

・ベスト・プレゼンテーション・アワード（最優秀賞）

伊藤 志帆 国際教養大学国際教養学部グローバル・スタディーズ領域

・ランナーアップ（優秀賞）

石黒 平 東京大学大学院農学生命科学研究科

### 顕彰



第8回 生物多様性みどり賞 (2024年)

生物多様性の保全や持続可能な利活用、それらの普及・啓発・共有の推進を目的とした「生物多様性みどり賞」を創設し、生物多様性に関わる顕著な功績が認められる個人・団体を顕彰しています。

◆第8回生物多様性みどり賞 受賞者



・ヴェラ・ヴォロノヴァ（カザフスタン共和国）  
カザフスタン生物多様性保全協会 エグゼクティブ  
ディレクター



・イサベル・アグスティナ・カルデロン・カルロス（ペルー共和国）  
環境活動団体 スマック・カウサイ 創設者兼CEO

\*授賞式は、生物多様性条約第16回締結国会議（COP16）の会場（2024年10月 コロンビア）で実施されました。



## 参加申し込み受付中!

イオン環境財団は、1990年に日本で初めて、地球環境をテーマにした企業単独の財団法人として設立し、アジアを中心とする世界各地で環境保全活動を展開してまいりました。2020年より各大学と連携し、SATOYAMA(里山)の再生や保全・利活用に取り組んでおります。

この度、未来に向けた「みんなで考えつくる ー新しいSATOYAMA(里山)ー」フォーラムを開催いたします。2013年から宮崎県綾町で、自然と共生をめざす森づくりを進めております。また、連携している各大学・自治体など多様なステークホルダーがそれぞれのアプローチで捉えたSATOYAMAの課題から意見交換を行います。

**開催日時** 2025年 **2月18日(火)** 10:00~15:00

**テーマ** みんなで考えつくる ー新しいSATOYAMA(里山)ー

**開催場所** 会場：国連大学 3階 ウ・タント国際会議場 申込×切：2025年 **2月10日(月)**  
オンライン：Zoomウェビナー 申込×切：2025年 **2月18日(火)**

**参加大学** 京都大学、国連大学、千葉大学、東京大学、東北大学、早稲田大学

**参加費用** 無料

**参加申込**

イオンSATOYAMAフォーラム



### プログラム

10:00~	開会
10:10~	第1部 イオン環境財団のSATOYAMAづくり 宮崎県綾町の事例発表 講演 パネルディスカッション 宮崎県綾町、JA綾町農業協同組合、綾町ユネスコエコパーク推進室、早稲田大学
11:30~	休憩
12:20~	第2部 SATOYAMAに関わる研究や実践内容発表 京都大学フィールド科学教育研究センター 新しいSATOYAMAづくりに関して参加大学からの取り組み発表 参加大学
13:50~	休憩
14:00~	第3部 SATOYAMAの未来に関する意見交換・パネルディスカッション

主催：公益財団法人 **イオン環境財団** 後援：環境省、国連大学サステイナビリティ高等研究所(UNU-IAS)

<お問い合わせ> 公益財団法人イオン環境財団 イオンSATOYAMAフォーラム事務局 TEL：043-212-6022 E-mail：ef@aeon.info

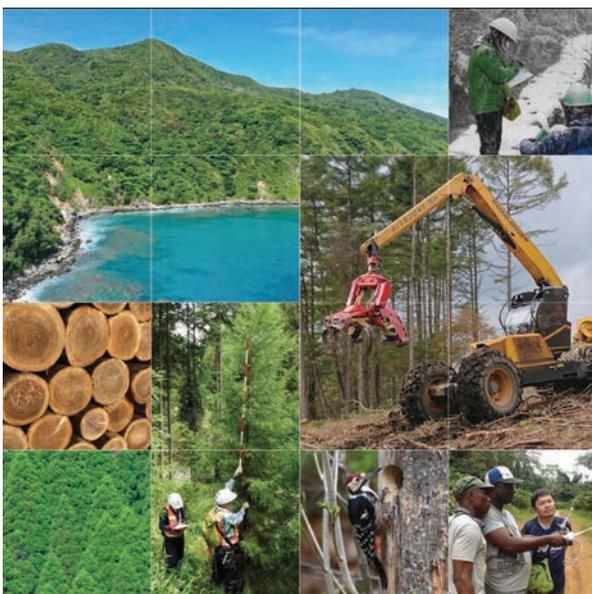
## 一般社団法人 日本森林林業振興会



山火事予防ポスター用原画及び標語の募集・表彰（写真左上）や植林・保育林業体験活動、森林教室・自然観察会等の活動（写真右上）などを行うとともに、森林調査、地上レーザスキャナ・ドローン空撮を用いた新たな調査手法の実証（写真中下・右下）、シスイエースをはじめとする森林・林業資材の販売活動（写真左下）等を通じて、森林・林業の振興に取り組んでいます。

<http://www.center-green.or.jp/>

## 一般社団法人 日本森林林技術協会



森林から、  
人と社会の未来図を描く。

一般社団法人 日本森林技術協会  
Japan Forest Technology Association  
<https://www.jafta.or.jp>

## 公益財団法人 ニッセイ緑の財団

幼稚園・保育園ご関係者 様

### 幼稚園・保育園の木のしおり(冊子) 樹木名プレート(樹名板) 寄贈のご案内

公益財団法人ニッセイ緑の財団からのお知らせです。  
弊財団では、こどもたちが園庭の樹木にふれあうことを通じて、身近な自然への関心を育むことを目的に、「木のしおり」「樹木名プレート」の寄贈活動（無償）を行っており、卒園記念としてもご活用いただいています。  
【小中学校向けの「木のしおり」は全国で累計1500校以上の実績】

### 幼稚園・保育園の木のしおり

園庭の木の中から8種類を選んでいただき、それぞれの写真とわかりやすい解説を掲載したオリジナルの冊子を園児全員に差し上げます。こどもたちの気づきなどを書く欄もあります。



### 樹木名プレート

園庭の木の名前やイラストをこどもたちが自由に書ける間伐材のプレート（15cm×9cmの板）を差し上げます。2箇所穴にヒモを通して樹木に括り付けることができます。



### ご利用いただいた先生からの声

- ◎貴重な経験になり、こどもたちからもヒノキの良い香りがすると好評でした。
- ◎「木のしおり」はこどもが持ちやすいハンドタイプで、カラフルで見やすく、解説もわかりやすかったです。
- ◎毎年、卒園記念として「樹木名プレート」を活用しています。

～お気軽にお問合せください～

公益財団法人ニッセイ緑の財団  
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-21-17虎ノ門NNビル8階  
電話：03-3501-9203 FAX：03-3501-5713  
E-mail：info@nissay-midori.jp



お申込みはこちら



## 愛媛県林材業振興会議

### 愛媛ブランド材



愛媛の豊かな自然の中ですくすくと育ったスギやヒノキは、たくましく凛として美しく、きめ細やかな肌目と光沢があります。



愛媛県林材業振興会議 〒790-0003 愛媛県松山市三番町4丁目4-1 (愛媛県林業会館内)  
(木と暮らしの相談窓口) TEL:089-941-0165 FAX:089-941-7566

## 愛媛県森林土木協会



### 治山愛林

#### 愛媛県森林土木協会

〒790-0003  
松山市三番町4丁目4番地1  
愛媛県林業会館内  
TEL 089-941-0196  
FAX 089-941-0196  
e-mail shindobokukyokai@forest.ocn.ne.jp

雲外蒼天

## 愛媛県山林種苗農業協同組合

～豊かな森林・みどりづくりは育苗から～

### 愛媛県 山林種苗農業協同組合

〒791-1121 松山市中野町甲146番地1  
TEL/FAX(089)963-2001

## 一般社団法人 四国林業土木協会



当協会は、小学生を対象とした植林活動のほか、防潮保安林等でのボランティアによる森林整備活動を通じて、森林・林業の振興に取り組んでいます。

一般社団法人 四国林業土木協会  
会長 嶋崎 勝昭  
高知市丸ノ内1丁目7-36 高知興林会館内

## 松山市

# 歴史をつなぐ 未来にのこす 道後温泉本館

約3000年の歴史を誇り、日本最古といわれる道後温泉のシンボルである「道後温泉本館」は、平成6年12月に公衆浴場で初めて、国の重要文化財に指定されました。松山市はもちろん、国の宝である本館を次世代へ大切に引き継いでいくため、平成31年1月から営業しながら保存修理工事に着手しています。工事施工業者をはじめ工事関係者、地元関係者など、多くの方々のご尽力で、工事完了に先立ち、令和6年7月11日に、約5年半ぶりに休憩室を含めた全館での営業を再開しました。



## 東温市

# 東温暮らしから始まる しあわせ TOON CITY

愛媛県の県庁所在地・松山市に隣接し、水と緑に恵まれた都市近郊田園都市として発展を続ける東温市。大型ショッピングセンターや大学病院など、生活に便利な都市機能に加えて、市街地から車で15分ほどで気軽に山や溪谷の自然とふれあえる、子育て世代に人気のまちです。住む人、訪れる人、働く人すべてが心地よい「県内トップクラスの住みやすいまち」東温市の魅力に触れてみませんか？



育てるけん 伊予の国から 緑の宝

# 第76回 全国植樹祭 えひめ 2026



大会シンボルマーク

## 令和8年春開催！

(会場：愛媛県総合運動公園)

### 愛媛県では60年ぶりの開催!!

全国植樹祭は、豊かな国土の基盤である森林や緑に対する国民的理解を深める国土緑化運動の中心的行事で、毎年春に、天皇皇后両陛下ご臨席のもと、記念式典や記念植樹を行います。

愛媛県では、昭和41年(1966年)に、温泉郡久谷村(現:松山市久谷町)の久谷ふれあい林において第17回全国植樹祭を開催して以来、60年ぶり2回目の開催となります。



両陛下による記念植樹

### 開催理念

- ① 国民の森林・林業に対する理解を深め、森林の整備や森林資源の循環利用を一層推進していく契機とし、持続可能な社会の実現につなげていきます。
- ② 霊峰石鎚山を頂点とする四国山地の豊かな森林を、健全な姿で次の世代にしっかりと引き継げるよう、県民参加による森づくりを推進します。
- ③ 森林が育む愛媛の自然や文化、産業を県内外に発信し、全国の方々との「絆」を深める「愛顔(えがお)」あふれる大会とします。



愛媛県  
ダークみきゃん

### 明日の森林へ贈る愛レター

プロジェクト

愛媛の森林や木材、木から生まれるモノ(家、紙等)に対する想いや未来へのメッセージを愛(らぶ)レターとして募集し、いただいた愛レターを、大会テーマソングや式典演出などに活用する県民参加型のプロジェクトです。

県内の各種イベントや電子フォーム等で愛レターを大募集中です！ ぜひご応募ください！！



詳しくはこちら



大会ポスター原画

白石 暖乃(はるの)さん  
(愛媛県立松山南高等学校砥部分校3年)  
※応募時

### お問合せ先

第76回全国植樹祭愛媛県実行委員会事務局  
(愛媛県農林水産部森林局森林整備課全国植樹祭推進室)  
〒790-0002 愛媛県松山市二番町3丁目6-5  
TEL:089-961-1134 FAX:089-961-1145



愛媛県  
こみきゃん

フォローしてほしいきゃん!

Instagram



X



Facebook



# 広げよう 緑と笑顔を 愛媛から



令和6年 愛媛県緑化キャンペーン [ポスター原画] 半沢 優衣 (今治市立日吉中学校 1年) [テーマ] 藤井 琉花 (八幡浜市立川之石小学校 6年)





木林<sup>もり</sup>  
林<sup>もり</sup>  
を  
活<sup>い</sup>  
か  
す



木林<sup>もり</sup>  
林<sup>もり</sup>  
を  
守<sup>まも</sup>  
る



原画：西尾 健成さん  
国土緑化運動・育樹運動ポスター原画コンクール  
入賞作品  
「見て!! 僕の宝物」

# 緑の募金

ご協力をお願いします

「緑の募金」は、身近な地域の森づくりをはじめ、国内外の森づくりや人づくりなどに大切に活用されています。



緑の募金

ご協力をお願いします

春の新緑シーズン(1月~5月)と秋の紅葉シーズン(9月~10月)の年2回  
家庭募金、街頭募金、職場募金、企業募金、学校募金などによって行われています。

緑の募金に関するお問い合わせはこちらまで

公益社団法人 国土緑化推進機構 0120-110-381  
電子メールアドレス bokin@green.or.jp



# 林野庁

## 「遊々の森」とは

遊々の森は、学校等と森林管理署長が協定を結び、学校等にさまざまな体験活動や学習活動を行うフィールドとして国有林を継続的に利用していただく制度です。

森林教室や自然観察、体験林業などを通じ、子供たちの人格形成や幅広い知識の習得を行う森林環境教育の場として活用されています。（2024年3月末現在、145カ所）

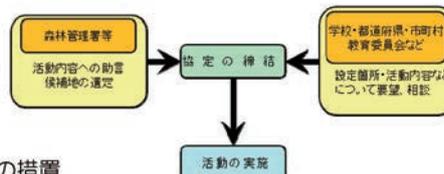
## 「遊々の森」活動の流れ

○遊々の森を活用いただける団体

学校、都道府県、市町村、教育委員会、学校法人など

○活用いただく場合の手続き

森林管理署長との間で、安全確保などの措置や費用負担、有効期間などの取り決めを含めた協定を締結していただきます。



森林教室



測樹体験



植樹体験

## お問い合わせ先

林野庁 経営企画課 国有林野総合利用推進室 03-6744-2323

[http://www.rinya.maff.go.jp/j/kokuyu\\_rinya/kokumin\\_mori/katuyo/kokumin\\_sanka/kyouteiseido/kyoteiseido.html](http://www.rinya.maff.go.jp/j/kokuyu_rinya/kokumin_mori/katuyo/kokumin_sanka/kyouteiseido/kyoteiseido.html)

## NPO法人 子どもの森づくり推進ネットワーク

木を植えて子どもの心を育む  
**JP子どもの森づくり運動**

<https://www.kodomonono-mori.net>

参加園募集中！



「JP子どもの森づくり運動」は、保育園・幼稚園・こども園を拠点にどんぐりを育てて植える森づくり活動を通じて、幼児期の子どもたちの「生きる力」と「環境意識」を育むことを目指す全国運動です。（特別協賛：日本郵政グループ）

[問合せ先]

NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク（子森ネット）

Tel:03-5755-3213 fax:03-5755-3081

[mail:info@kodomonono-mori.net](mailto:info@kodomonono-mori.net)

## えひめ自然保育連盟



えひめ自然保育連盟とは、自然の営みに寄り添い、自然とつながる生活や文化を基軸にした保育・幼児教育（＝自然保育）の普及・推進を目的とした組織です。2023年8月に愛媛県内で自然保育に取り組む団体が連携して発足しました。

えひめ自然保育連盟

〒790-0833 愛媛県松山市祝谷3丁目6-1

TEL 080-8902-9627 (山本)



Instagram

## こどもの森づくりフォーラム実行委員会名簿

(敬称略)

氏名	組織名・役職	備考
諏訪 幹夫	林野庁 森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長	常任構成団体
沖 修司	公益社団法人 国土緑化推進機構 副理事長（実行委員長）	
塚原 茂	特定非営利活動法人 子どもの森づくり推進ネットワーク 代表理事	
俊成 秀樹	愛媛県 農林水産部 森林局 森林整備課 課長	愛媛県関係
阿部 淳子	愛媛県 保健福祉部 生きがい推進局 子育て支援課 課長	
芳野 昌宏	松山市 農林水産部 農林水産振興課 課長	
鍋田 豊樹	伊予市 産業建設部 農林水産課 課長	
田中 聡司	東温市 教育委員会 事務局長	
清家 康生	公益財団法人 愛媛の森林基金 参事	
半田 康	公益財団法人 ニッセイ緑の財団 常務理事	
宮林 茂幸	東京農業大学 名誉教授	アドバイザー
仙田 満	公益社団法人 こども環境学会 代表理事	

## アーカイブ



### YouTube

林野庁 YouTube チャンネル「maffchannel」に、「こどもの森づくりフォーラム in えひめ」のページが開設され、記録動画が公開されています。

下記 QR コードから、全体のダイジェストや、各プログラムごとの動画がご覧いただけます。



**MAFF**  
Ministry of Agriculture,  
Forestry and Fisheries  
農林水産省



### 登壇者発表資料

Google Drive に、発表資料（登壇者の公開許諾が取れた資料）がプログラム別に公開されています。下記 QR コードからご覧いただけますのでご利用ください。



# こどもの森づくりフォーラム in えひめ

## 【主催】こどもの森づくりフォーラム実行委員会

### 【実行委員会構成団体】

林野庁、(公社)国土緑化推進機構、(特非)こどもの森づくり推進ネットワーク  
愛媛県、(公財)愛媛の森林基金、松山市、伊予市、東温市、(公財)ニッセイ緑の財団

### 【後援】

文部科学省、環境省、こども家庭庁、(独)国立青少年教育振興機構  
(一社)日本環境教育学会、日本自然保育学会、(公社)こども環境学会  
(一社)日本保育学会、国際校庭園庭連合日本支部、(特非)自然体験活動推進協議会  
(社福)日本保育協会、(特非)全国認定こども園協会、(一社)日本森林インストラクター協会  
(特非)森づくりフォーラム、(公社)日本環境教育フォーラム、こどもエコクラブ全国事務局  
(公財)日本自然保護協会、(公財)日本生態系協会、日本ビオトープ管理士会  
(一社)全国保育士養成協議会、(公社)全国私立保育連盟、全日本私立幼稚園連合会

### 【特別協賛】



### 【特別協賛】

(一財)日本森林林業振興会、(公財)ニッセイ緑の財団、(一社)日本森林技術協会  
(一社)四国林業土木協会、(公財)愛媛の森林基金、愛媛県森林土木協会  
愛媛県山林種苗農業協同組合、愛媛県林材業振興会議